

---

# 魔法先生ネギま！～転生者投入～

ジュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜転生者投入〜

### 【コード】

N3899M

### 【作者名】

ジュン

### 【あらすじ】

転生チートモノを書いてみました。

頑張って少しずつ書き方上手くしていこうと思います。

長い目で見てくださいと有り難いです。

## 主人公紹介

主人公紹介しようと思います。

旧名

飴鷲<sup>かざさぎ</sup> 慧<sup>けい</sup>

身長 175cm

体重 65kg

至って平凡な只の学生。

ただし、若干オタクぎみ。

チートをこよなく愛し、チートに憧れを抱く少々頭の足りないおバカさん。

喧嘩も運動もそこそこだが、頭はとっても悪い。

けど、悪知恵に関しては相当なもの。

授業中は、いつもラノベを読んでいる。

体育は、マジメにする。ちなみに、持久走全国9位。

オタクなのに、体力がバカみたくにあるのはかなり謎。

たまに、授業中ゲームもしている。

そして、マンガもたまに読む。

握力もバカみたくに高い。

仲間からは『握力神』と呼ばれていた。

ちなみに、握力85kg。

「俺は、体力と握力だけチートだぜ！チートサイコー！！」

……うん、とてもバカみたくです……。

改名後

ルーク・バルク

気分でつけた。神から、チート能力フル貰って最高にHIGHになった。

若干性格変わってる。

転生時の肉体年齢は5歳だが、強さは軽く化物以上。

見た目

金髪のナギ程度の長さのアシメ。

顔は神の力でムカつくくらい整った顔をしている。

得意属性

ほぼ全部（特に幻術）

能力値

魔力 SSS

気 SSS

運動 A+（魔力で補充後SSS）

知力 A

運 C-

呼び名

『破壊神』 『幻神』 『災厄の足跡』 『光纏う救済者（saviour

rof Lux）』 『剣帝』

以上、次から本編です。

## 神との邂逅

ーあれ……、ここは…どこだ？

俺が目を覚ましたときにあっただのは何も無い真っ白な空間のみだっ  
た。

…これは…どうなっている？

「おお、やっと目が覚めたか？」

其処には、髭の長い爺がいた。  
こんな爺今いたか？

「ああ、爺。アンタ誰だ？」

「僕は爺じゃない！神じゃ！！」

は？……どうやら、この爺はアタマの狂ったアホらしい…。  
何か可哀想だな……。

「こら、そんな『コイツ何言ってるの、アタマ狂ってるじゃね？』  
みたいな目で見ろな！！」

どつやら、俺は気付かないうちにそんな目で見てたらしい。

「まあ良い、爺。アンタの証明を見せてみるよ。」

そう言うと、爺は頭の上に輪っかを出して見せた。

「……！成る程。確かに人では無いみたいだな……。」

そう言うが俺は、こんなモン中々信じられん。  
異常だ、この状態自体が……。

少し此処に来る前の事を思い出してみた……。

（来る前）

俺はいつも通りに学校に行ってた。

俺の席は教壇から見て一番後ろの一番右という神がかったくらい良い場所だ。

ここじゃ、ラノベやマンガ、ゲームもし放題だからな。  
どつやら、三時間がもう終わったみたいだな……。

「慧や〜ん」

「何だ、バカ。」

このバカは、俺のダチの三野<sup>みの</sup> 匡史<sup>ただし</sup>だ。

「慧ちゃん、酷いッ！！頭じゃ、変わらないのに！」

「ほお、貴様の足りない頭潰してやるうか？」

「慧ちゃん、冗談やん、ホレ！」

そう言っつて、リンゴを投げてきた。

グシャッ！

「慧ちゃん、ホント握力神やな〜（苦笑）」

「それで、どうしたんだ？匡史。」

「そやって〜、慧ちゃん、次体育やでさっさと着替えへんとアカンよ？」

「なにッ！さっさと見えよ、それは！」

そして、体育の時間が始まった……。

「テメエ等、今日は持久走だあ！男子！！今回こそは、慧に一矢報いてみせるー！」

持久走か。余裕だな

……………結局、俺に叶うわけもなく一番は俺だった。

「慧ちゃん、ホント体力オバケやんな……………」

「ウルセエよ、バカ。」

そんな感じに6時間目まで終わった。

「この前のテストの返却をするぞ〜!」

「じゃあまず、浅間から来い!」

「はい。」

「……………、饒鷲!」

「はいよ〜。」

「お前……………、もっとちゃんと勉強しろ!」コンッ( )

「イテエ!何すんだよ、余計頭悪くなるわ!」

「ほう、これ以上頭が悪くなる余地があるのか…?」

俺の答えは真っ赤だった。



まさかマジだとはな(汗)

「ホントに申し訳ない!!ついその……手が滑ってしまったの。」

「オイ、待て爺!手が滑った……だと?そんな理由で俺は死んだというのか!?ふざけるなよ!？」

「本当にスマン!!お詫びに何個か何でも願い叶えて、転生させてやるから、許してくれ、お願いじゃ!!!!!!」

ほう、何でも……だと。

素晴らしいな、俺の長年の夢が叶うじゃないか!  
チート能力を手に入れるという

「分かった、で?どの世界に行くんだ?」

「何でも選べるが何処が良いかの?空想の世界も可能じゃ。」

何!?サイコーじゃん!!

寧ろ、神様殺ってくれてありがとうだよ

「んじゃ、ネギまの世界の大戦中で良いか?」

「勿論じゃ!それで、願いはどうするのじゃ?」

「じゃあ、身体能力をフルに上げてくれ、化物すら余裕で越えるくらいに。あと、魔力と気を最大まで上げてくれ。それこそ、底無しと言われるくらいに。あと、知識を何でも解る程度に与えてくれ。この中には、魔法の知識と勉強両方入れて欲しい。それと、闇の魔法の習得だ。あと、見た目を金髪で紅い目、顔をム力つくくらい整った顔にしてくれ。最後に、向こうの世界には、肉体年齢が5歳で送り込んで欲しい、勿論能力は下がらずに頼む。」

ちと、望みすぎたかな…。

「ああ、分かった。」

「い、良いのか!？」

「ああ、元々儂が手を滑らしたせいだしの。それに、見物両も加えての。」

「見物もするのか。まあ、良いが。」

「とりあえず、条件の確認をするぞ。まず、化物以上の身体能力。次に絶対量の魔力と氣。それと、完全な知識と闇の魔法の習得。あと、見た目の変更。最後に、肉体年齢の変更…じゃな？」

「ああ、その通りだ。頼んだよ、神様。」

「うむ、儂も気分が良い。ついでに、戦闘センスと魔法と氣のセンスもつけとくの。」

「ありがとう、神様 何から何まで悪いな。」

「気にするな、それじゃあ、こんな感じじゃな。」

その瞬間、俺の望み通りに見た目が変わった。それに、中から力がみなぎるの分かる。スゲエな、神って……。

「アリガトな、それじゃあ、そろそろ送ってくれても良いか？」

「勿論じゃ、ならば行くぞ！」

そう言うと、俺の目の前が瞬間的に変わった。

「スゲエな、此処がネギまの世界か。魔法を覚えながら街に向かい、名を広めるか……。それに、この世界には『完全なる世界』がいるからな。名が広まったら奴等を潰しにかかるか。」

どうやら、大戦初期に降り立ったみたいだな。

ナギに会うのはあと、1、2年頃にするか……。

「それにしても、生まれ変わったのだから、名前を変えるか。嬉しいことに顔ハーフって感じだしな ん、……………よし！ルーク・バルクにしよう！」

名前を決めた理由か？

気分だ！

じゃあ、街に向かいながら、魔法の特訓と、身体を馴らすか……。  
そう思う、ルークだった……。

## 神との邂逅（後書き）

文才鍛えていくつもりです！  
よろしくお願いします。

## 龍種の討伐

この世界に着いた俺は、まず今が何年なのかを確認した。

今は、1981年。ちょうど大戦が始まる年だった…。

「おおー！ー！ー！あの神ちょうど良いときに送ってくれたな。よし、名を上げるぜ！ー！」

そういつて、俺はとりあえず高い難易度の依頼を手に入れるために町へ向かった……………。もちろん魔法の練習もしながら……………。

ー道中ー

魔法かあ……………。

どんくらいなら、出来るかな？

つてか、始動キー考えなくちゃな……………。

とりあえず、一度練習するか。

とりあえず、手ごろなところをあの大岩に当ててみよ（笑）

「えつと……………、ゴホン！」

「光の精霊100柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手光の100矢！」

…………… ナニイ！！！！

嘘だろ！？

岩に穴開いたぞ！？

有り得ん、どういうことだ！

威力が高いなんてとこじゃねえだろ（汗）

…………… まさか…………… な。

うん、一応確認のためにやってみよ。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷！」

何だと！？

溶けた……………。

いや、ヤバイなこの力……………。

とりあえず、始動キー考えるか……………。

…………… よし、思いついた！

「リ・ゲル・クラスト・カタストファイ！。光の精霊100柱！集い  
来たりて敵を射て！魔法の射手光の100矢！」

ちなみに、始動キーは適当だ

確かカタストファイはギリシャ語で破壊とか言う意味だった気がするから、入れたただけだ

…………… それにしても、威力タケーな。

じゃあ、始動キーも考えたことだし行くか……………。

……やっ到着いたー！

よし、依頼の確認するか！

ん？もしかして、この板に貼ってあるのが依頼？

あ！確かにそうみたいだな。

……大した依頼ないな……

どうしようかな……。

うおっっ！！

スツゲエ依頼あんじゃん！！

ー依頼書ー

依頼内容 龍種の大群の討伐

難易度 SSS

報酬 100000ドラクマ&ダイオラマ魔法球

ーー

よし、これにしよう！

それにしても、ダイオラマ魔法球って???

んー、確かあのエヴァンジェリンが持ってたヤツだっけ？

……なら、ソレ手に入れたら修行楽になるな……。

……そして、来たのはいいのだが……

「なんだ、請けたのは貴様みたいなガキなのか！？だとすれば、今回の依頼は失敗か……。」

オイ、このヤロウ。

俺の事をガキだと!?

殺してやるうか、このクソハゲ…………。

「ほう、キサマ人の力を見ず人の外見だけで見るとはいい度胸だな！殺してやるうか！」

俺は、初めてなんだが7割ほどの殺気を放ってみた。

……………うわっ!!

苦しそうだな…

「わ、分かった…………。分かったからその殺気を抑えてくれ…………。」

「ならば、俺は行かせてもらおうとするぞ。」

「あ、ああ。分かった。頼んだぞ…………」

……………着いたな、壮大だな、ここまで龍が集まっているのを見るのは…………

数は…………おおよそ50か…………?

見た目から見ると、翼竜、黒龍、祖龍、鳥龍、白龍、ワイバーンつて…………。

相当なレベルの化物が多いな…………。

いっちょ、行きますか!

「リ・ゲル・クラスト・カラストフィー。来たれ雷精風の精!雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐!雷の暴風!」

うん、二体ほど消し飛んだな。  
そういえば、俺って闇の魔法マジック・エレミア使えるようにして貰ったんだっけ…。  
やってみるか！

「リ・ゲル・クラスト・カラストファイ！。契約に従い我に従え氷の女王来たれとこしえのやみ！えいえんのひょうが！全ての命ある者に等しき死を。其は安らぎ也。おわるせかい！掌握！！」

この時点で気づかれたみたいだ。  
命の危機を感じたのか？

「まだまだ行くぞー！リ・ゲル・クラスト・カラストファイ！。来たれ氷精大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を！こおる大地！掌握！二連、魔術充填！『絶対零度』」

「グガーーーーー！！」

その瞬間、龍が俺の体に触れる。その瞬間、龍が凍りついた…。

「これが、この状態の能力か。良いな、かなり強い能力だ。」

そして、俺は敵を凍らし、破壊する。

そして、あっという間に残りが10ほどになった。

「早いな、そろそろ行くぜ！右腕開放！こおる大地！更に左腕開放！おわるせかい！」

そして、龍は氷漬けとなった。

「早いものだな、オラツ!!」

そして、俺はその氷を破壊した……………

「終わったぞ、依頼主よ。これが証拠だ。」

そうして、俺は凍った龍の頭と角を差し出した。

「なんと!?まさか、ただ一人であの龍共を倒しきるとは……………。貴様、名はなんと言うんだ?」

「俺の名はルーク・バルクだ。覚えておけ!」

そうして、俺はダイオラマ魔法球と金を貰い町を出た。  
この後、数週間後から俺は、『破壊神』『災厄の足跡』と呼ばれることになるのだが、そんなこと知る由もなかった……………。

## 龍種の討伐（後書き）

少しチートすぎたような気がします……。

それに敵が喋ってないような……。

次もがんばります！

## 少女との出会い（前書き）

オリキャラ、オリ魔法出します。  
後書きで説明すると思います。

## 少女との出会い

…あれから、一週間が経った。

一週間といつてもダイオラマ魔法球の中で修行したりしていたから、数カ月に近い。

俺の魔法球は1時間を3日に設定した。

そのおかげか、コノ体の扱いにも慣れ、更に強くなった。

やはり、膨大な力に馴染むためには其れなりの時が必要だな。

それに、俺が修行している間に『破壊神』などと呼ばれるようになった。

誰だよ、そんな名前つけた奴……。

とりあえず、街へ向かうとするか。

……。

ム、見えたな……。

！何だ？火？

まさか、襲われているのか？

「チツ！向かうぞ！」

そう言つて、俺は風の属性を足に付加させ、全力で走る。

……ついたな。

これは……、魔族か？

かなりの量だな……。

「人間かあ？キサマは運が悪いなあ？ココで死ぬことになるんだか

らな！」

そう言つて特にデカイ魔族が俺に斬りかかってくる。

「身の程知らずが……。」

そう言つて俺は魔族の剣を人差し指と親指でつまむ。

「なっ！キサマ本当に人間か！？」

「人間だ。貴様等より強い……な。リ・ゲル・クラスト・カタストフ  
イー。闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて、敵を喰らえ！白き  
雷！」

何故だろう？白き雷が雷の暴風並みにデカいんだが……。

「消し飛んだか……。」

目の前にいた魔族が全て消し飛んだ。  
生きているヤツを探さないと……。

「いた……！」

少し先に小さな女の子が魔族に襲われていた。

……ヤバいな……。  
剣が振り下ろされそうだ……。

「クッ！ゲート！」

エヴァンジェリンが使っていた影のゲートとは違い、俺は空気を媒

介としたゲートを使う。

そして、その子の目の前に出て魔族の剣を止める。

「何だ、貴様？」

「貴様に名乗る名は無い！」

そうやって俺はソイツに回し蹴りを喰らわす。  
しかし、ヤツは其れを避けた。

「なにっ！」

「ほう、汝は強者のようだな。」

「チッ！リ・ゲル・クラスト・カラストファイ！。来たれ光精、闇の精。相反する力を混同し全てを飲み込め！光闇の奔流！掌握！充填『闇光天使』！」

そうすると、俺の体から片翼が白く、片翼が黒い羽が現れる。そして、体から光を放っていた。

「汝は何者だ。人間か？」

「当たり前だろう。ただ強いだけだ。」

「愚問だったな。ならば行くぞ！」

そう言って斬りかかってくるが、俺の片翼が其れを阻む。そして、もう片翼が羽を飛ばし攻撃する。

「チイツ！強い…！」

そうして、後ろに下がってきたところを…

「解放。光闇の奔流！」

其れを避けられる訳もなくその魔族はその奔流に飲み込まれていった…。

「クツ！此処までとは…。」

そうして、その魔族は消え去った。

町の中に魔の気配は感じないから、全て殲滅し終えたのだろう…。

「これで終いみたいだな…。大丈夫か？」

「う、ウン、ありがとう。…同じくらいの年なのに強いんだね！」

確かにコノ姿は5歳だったな…。

「どうも。俺の名はルーク・バルクだ。よろしく。」

「私の名前は、ミーシャ・ルーンです。よろしくね、ルーク」

「俺はもう行くから。これからも頑張って生きろよ。」

「え…？ちょっと待って！私も連れて行って！」

「……………何故だ？」

「此処にいても生きる目的が無いの！私も一緒に連れていって……？」

そう言つて涙目の上目使いで見てくるミーシャ。これじゃ、俺が泣かしたみたいじゃないか……。

「仕方ないな……。分かった、良いだろう、俺と共に来るか？」

「ウン これから宜しくね」

この後、俺はミーシャと仮契約を交わした。全く……、俺はロリコンじゃないのだが……。いや？この姿じゃ年相応という扱いになるのか……。

その後、8カ月ほど名を売るために数々の高難易度のクエストをクリアした。

その間、剣を手に入れ、剣の腕を磨いた。そして、幻術に関して右に出るものはいないので？というくらいに幻術が得意になった。どうやら、才能があつたみたいだ。

その過程で俺の通り名は『破壊神』『幻神』『滅龍師』『剣帝』『災厄の足跡』『光纏う救済者』の名をえた。

一緒にいたミーシャも魔術の才と格闘技の才があつたようで今では、並大抵の者では歯が立たないほどに強くなった。

ミーシャの通り名は『獄炎の女王』『闘神』『救いの少女』というのがついた……。

ちなみに、上二つがついた理由は俺が幻術で大人の状態に変えた状

態でミーシャが暴れたからだ。

全く…強くなつたからって暴れるのもほどほどにして欲しいな…。

あと、ミーシャのアーティファクトは『煉獄の劔』ねんごくのけん。

片手剣に近い形状で、刀身から炎を発することの出来る炎剣だ。

其れにしても、そろそろ一年か…。

もうじき紅い翼とエンカウントした方が良いな…。

どう接触しようか…。

最初は力を図つた方が良さそうだな。

「ルーク 何考えてるの？」

「ああ、気にするな、ミーシャ。何でも無いからな。」

「本当？」

「ああ、本当だ。次は紅い翼に会いに行くぜ？」

「うん 分かつたあゝ 戦うの？」

「ああ、多分な。実力を確かめたいし」

「ウン じゃあ、行こ？」

「ああ。」

紅い翼は今どこにいるんだろ？

魔力感知して探すか…。

そうして、紅い翼にエンカウントしようとするルークだった……。

## 少女との出会い（後書き）

オリ魔法

光闇の奔流

光と闇の力を混ぜ合わせ、その反発し合う力を使い、触れるモノを消滅させる。

オリキヤラ

ミーシャ・ルーン

長髪で赤色の髪。目は蒼色で顔は美少女といって指し違いない。将来有望な女の子。得意魔法は炎。

## 紅い翼との邂逅

とりあえず、俺は感知魔法を使い、ナギを見付けることにした。

……フム。

見つかったな。

ならば、行こうか。別にこの姿で構わないな。さて、まずどうでようか…。

「ねえ、ルーク どうやって会おうの〜？」

「うん、ミーシャ。どうしようか悩んでる所なんだ。」

「別にフツーに行けば良いんじゃないの？」

そう言ってミーシャは小首を傾げた。

「それもそうだな。なら行こうか。」

「わーい」

そうして向かうことにした。俺は空気のゲートを開いてナギの前の場所に座標軸を合わせ、ゲートを開いた。

「なっ、何だ！？このガキ!？」

俺はその言葉を聞いてキレてしまった。

(ああ、コイツ殺そうかな……。)

そう思ったが俺は必死に殺気を抑え話し掛けた。

「俺の名はルーク・バルク。でコイツが…」

「従者のミーシャ・ルーンよ。よろしく」

その言葉を聞いた瞬間ナギとラカン以外の奴が騒ぎだした。

「何だと!?あの「剣帝」か!?!」

「「光纏う救済者」や「救いの少女」とも呼ばれている者達ですね。」

そう近衛詠春とアルビレオ・イマが言う。

「ほお、よく知っているな。その通りだ。」

「で、そのルークとミーシャとやらは何しに来たんだ?」

「そうだな、ナギ。とりあえずはお前等の力を見に来た。」

「そうか。俺と戦いてえって事なら受けてたつぜ!」

「いや、俺はナギ、お前とラカンの相手をする。ミーシャ、後は頼んだぞ!」

「うん」

「じゃ、幻術使ってくぜ」

そう言って、ミーシャを大人の姿に変える。

「なっ、「獄炎の女王」!？」

「じゃ、ミーシャ、頑張れよ」

「うん、ルークも頑張ってるね？」

「もう良いか？」

「ああ。良いぜ、ナギ、ラカン。」

「なら、行くぜ！」

まずラカンが俺に向かってきた。

「オラアアアアー!!！」

「むっ、重いな。」

そう言いながら、ラカンの剣を止めると後ろから魔法の詠唱が聞こえた。

「ー吹きさすべ南洋の嵐!雷の暴風！」

その瞬間ラカンは横に飛ぶ。

「チツ！障壁全開！」

そう言っつて雷の暴風をガードする。

そして、煙が晴れたすぐ後にラカンのパンチがとんできた。それを受け止める。そして、その瞬間回し蹴りを放つ。

「又オツ！」

ラカンを飛ばし魔法の詠唱を始める。

「リ・ゲル・クラスト・カラストファイ！。百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷！固定！百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷！固定！百重千重と重なりて走れよ稲妻！千の雷！固定！三連掌握！『雷神招来』！」

そう言っつた瞬間、ルーク自身の体が雷に変わる。

「何だよ、そりゃあ。反則だろ…。」

「行かして貰うぞ。」

そう言っつて攻撃を開始する。

ゲートを使っつての瞬動を行い、完全に移動位置が把握できない状態で全力で殴る。

その瞬間ラカンがノーバウンドで100mくらい吹っ飛んだ。

「ぐおっ！！」

「ラカン!…おいおいマジかよ…。」

ナギはこんなヤツに勝てんのか?みたいな顔で見てくる。

そうして、何合か打ち合う。

「そろそろ締め行かして貰うぜ!」

そう言つて、攻撃を仕掛ける。しかし、ナギはそれを紙一重でかわし攻撃を仕掛けてくる。

「やるな!だがしかし!」

俺は先程ラカンに使つた術『転移瞬動』を使い殴りかかる。やはり、移動箇所を把握できない為にナギもすぐに殴り飛ばされた。

「ウワツ!」

二人とも足を震わしながら立とうとするが血へドを吐き立てなかつた。

「しゃあねえな、回復魔法使つてくか。『治癒』」

無詠唱で回復魔法を行う。

「ツエエな、ルーク。」

「其れほどじゃねえよ。」

「ホントガキとは思えねえよな。」

ラカンがそう言ったのでラカンに右腕を突き付ける。

「ラカン死にたいのか？ならば一思いにやってやるうか……。右腕……すいませんでした！」良いだろう。」

「コエエ……。」

ラカンは軽く顔を蒼くしながら言った。それと同時に俺は双腕を空に向ける。

「三連解放！」

空に三対の千の雷がとぶ。その威力はナギの数段上に行くものだった。

「スゴすぎるだろ……。」

ナギはその威力に啞然としていた。

「でもまあ、合格だな。」

そうやって俺達はミーシャの元に向かう。

ミーシャはギリギリだが他のヤツを倒し終えていた。

「ハア…ハア。ルーク、何とか勝ったよ……。」

「お疲れさま、ミーシャ。」

そうやって幻術を解く。すると大人の姿だったミーシャは子供の姿

に戻った。

「『治癒』。」

そう言っつて全員を回復させる。

「しばらくたって」

「なあ、ルーク。」

「何だよ、ナギ？」

「どうだ？俺達の仲間にならねえか？」

「まあ、良いぜ。ミーシャも良いよな？」

「うん 私はルークが望むなら」

「と言うわけで俺達も紅い翼に入れて貰うぜ。良いか？詠春、アルビレオ？」

「はい、構いませんよ。」

「俺も良い。」

「それじゃ、これからよろしくな。そういえば、お前等はこの戦争の真実は知っているな？」

「完全なる世界か？」

「そつだ。俺はソイツ等と戦うが、お前等は？」

「俺達もだ。」

「なら、俺達は情報を仕入れるために完全なる世界の拠点を潰して  
回る。」

「分かった。情報頼んだぞ！」

そうして、俺達は拠点潰しに向かうことにした……。

## 紅い翼との邂逅（後書き）

オリ魔法

『転移瞬動』

空気のゲートを瞬動中に使うことで瞬動による移動地点を把握できないようにして意表を突く。

一見フツの瞬動に見えなくもないので気付くまでに時間がかかる。

## 情報の採集、そして合流

アレから数ヶ月…

俺達は数々の怪しい拠点を潰し情報を多少手に入れてきた。

だがあまり質の良い情報とは言えなかった。

だが、今から向かう基地は特に情報の質が良いようだ。

(全くやっとなりが報われるな…)

「行くぞ、ミーシャ！」

「うん！」

そうやって頷いたので俺はゲートを開いた。

(其れにしても、やはりこの力はチートだな…)

そうして、基地内への侵入を果たした…。

現在、俺達は基地内の散策をしている…。

「おかしい……。」「

「何が？」

そう言つて小首を傾げるミーシャ。

「余りにも人気が無すぎる…。」

「うーん、ご飯なんじゃない？」

(駄目だ…、能天気過ぎる…)

「アホか、罨だよ罨！」

「ええっ！そうなの！？」

「気づいて無かったのか……」

「うん、ゴメンね？ルーク…」

そう言つてしよげるミーシャ。

「まあ、良い。少しずつ目が廻るようにしような。」

「うん！」

取り敢えず、相手の罨に乗ってやることにした。負けはしないからな……。

俺達は最も怪しい部屋に入り物色し始めた。

しかし、おかしい事に何一つ手がかりが出てこない。

(おかしい…、何故一つも手がかりが出ない…。ならば致し方無いな…、探知魔法を使うか…)

俺は探知魔法を使い、完全なる世界に関する情報を探し始めた。

俺の探知魔法はその情報に関する動きなどの情報や物的モノ等を霧  
囲気や線で表すことが出来る。

其れを見るとどうやら隠し部屋があるみたいだ。

俺は隠し部屋を開き、中の情報の確認をしだした…。

「成る程…。これはアタリだな…。」

そう言っただけだと見ていると爆音が聞こえた。

「何だ!?!」

「破壊神! かかったな! 貴様も此処で終わりだ!」

其処には数多の鬼神兵に龍種等がいた。

「此処では貴様の闇の魔法もゲートも使えんぞ!」

おいおい、マジかよ…

「メンドイな、全く…」

久し振りにフルで戦えそうな敵か…おもしろえ！

「怖じ気付いたのか、破壊神よ！」

「ハハハハッ！おもしろえ！マジでやってやるよ…。『封印解放』」

そう言うと、ルークの魔力・氣・肉体能力が解放される。

「さて、逝こうか、完全なる世界の道具共…。死の時間だ…。『バースト』！」

バーストによって身体能力を増大させ、断罪の剣を持ち、一気に鬼神兵を数体消し飛ばす。

「なっ、化け物が…！」

そう言って、逃げ出そうとする敵を真っ二つに切り裂いた。

「グアアアアア…！」

「クソ野郎が……。ミーシャ！さっさと片付けてナギ達の元に向かうぞ！」

「うん！」

そうして、敵を圧倒的に潰した…。

「終わったな、ミーシャ。」

「うん…うん。」

ミーシャはかなり疲れてしまったみたいだ。

「お疲れさま、ミーシャ。……『再封印』」

「あ、ありがと、ルーク……。……何でルークは力を抑えてるの？」

「過ぎた力は身を滅ぼすんだよ。強すぎる力に心を蝕まれる可能性が無くは無いからね。」

「そうなんだー…、良く分からないや。」

悩みながらそう言ってくるミーシャ。

「いつか解る日が来るよ……。じゃあ、行こうか。ゲート。」

そう言っただけ俺はゲートを開く。

……見知らぬヤツが何人かいた……。

「よお、ナギ！情報…持ってきたぜ？」

「ルーク！毎回びっくりな出方だな……。」

「誰だ？」

「ああ、ガトウ。コイツは俺等の仲間の……。」

「ルーク・バルクだ。」

「ほう。噂の『破壊神』やら『光纏う救済者』とか呼ばれている男か。」

「そ。よろしくな、ガトウ！で、他のヤツの名前は？」

「タカミチです！」

「クルトです。」

「ほう。よろしくな、タカミチ、クルト。で、其処の嬢ちゃんは誰だ？」

「アリカ姫だよ。」

「そうか、よろしくな、ウエスペルティア王女、アリカ姫。」

「うむ、よろしく頼む、ルークよ。」

「其れにしても、ルークさん、俺等より小さいのに強いんですね！」

「「あっ！」「」

そう言った瞬間ナギとラカンがやっちゃまったみたいな声をだす。

（まさか、若造に小さいのと言われるとはな……血祭りに上げてやるっか……）

「タカミチ、地獄をみたいなら直ぐに送ってやるっ……。」「

そう殺気を出しながら言ったら、タカミチは顔を青くして顔を横に振る。

「ナギ、何でルークは怒っているんだ（ボソッ）」

「ガトウ、ルークに『小さい』は禁句なんだよ…（ボソッ）」

「ナギ、ガトウ！」

「「は、はい！」」

「ボソボソ人の事を喋るのは…止めような。…うっかり拳が滑っちゃうかも知れないぞ？」

そう殺気全開で笑いながら言う。

「「すみませんでしたッ！」」

「良いだろう。タカミチ。」

「は、はい！」

そう言ってタカミチが背筋をピンと伸ばした瞬間デコピンを放つ。すると、タカミチは飛び転がって逝った……

「全く…其れより、吉報だ。完全なる世界の情報が手に入った。…まず、コレが誰だか解るか？」

そう言って、ある写真を取り出す。

「今の執政官だな。これがどうしたんだ。」

「コイツも完全なる世界に関連している可能性がある。」

「「「なっ!」「」」

「メガロメセンブリアのナンバー2が完全なる世界の手先なのか!」  
「?」

「あくまでそう言う可能性があると言うことだ、ラカン……。」

「それとコレは他の資料だ。ガトウ、お前に渡しておく。」

「ああ、分かった。ルーク、何処に行くつもりだ?」

「修行してくる。魔法球の中に入ってるから、用事が有るなら呼び出してくれ。」

「分かった。」

そうして、俺は魔法球の中に入って行くのだった……。

**情報の採集、そして合流（後書き）**

キャラ、壊れ気味？って感じですよ。  
次も頑張ります！

## 大戦中（前書き）

結構展開早くてスイマセン。  
また、オリキャラ出します。

## 大戦中

アレから、俺達は更に活動をしていた。

そのおかげで、ナギのヤツが執政官がクロという証拠も見つけてきた。

で、今現在姫さんが帝国第三皇女の元に向かうところだ。

けど、ナギのヤツが姫さんの怒りを買ったことを言ったのか、両の頬を叩かれていた。

其れを見て、ラカンにはバカみたいに笑っていたし、俺も多少だが笑っていた。

「ハハハハッ、バカだな、ナギ！」

「笑うな、ルーク！」

「いや、間抜けすぎんだろ…」

「全く…」

そう言って話しつつ、俺達は姫さんを見送った…。

それから、ガトウがマクギル元老議員と話していた。

俺は、会話を横で聞いていたが、どうやら弾劾手続きをするために

法務官を呼ぶので、証拠の品とナギを連れてきてくれとのことだった。

(そう簡単に終わるのか……？完全なる世界が関わっているのだから、罠があると考えるのが妥当だろうな……)

俺達は今ナギと俺、ガトウとラカンでマクギル元老議員の元に来ていた。

「マクギル元老議員」

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「は……法務官はまだいらっしやいませんか」

「法務官は……来られぬこととなった」

「……ハ……？」

これにはガトウも驚いたようだ。

(やはり罠か……？ならば、本当のマクギル元老議員は既に死んでいると言っことか……)

俺は取り敢えずナギに小声で話し掛けてみた。

「ナギ、アイツ偽物だな」

「ああ、そうだろうな」

「どうする？俺がブツ殺すか？」

「いや、俺がやる」

そう話している間に偽マクギル元老議員の話が進んでみたいだ。するとナギが言い出した。

「待ちな」

「何かね？」

「あんたマクギル議員じゃねえな、何もんだ？」

そう言うと、ナギは偽マクギル議員の頭を燃やした。

すると、二人はびっくりしたみたいだ、ナギに焦って何か言っているのが聞こえる。

そうしてる間に炎がはれ、アーウィルンクスが出てきた。

「……よくわかったね、千の呪文の男、それと破壊神。こんな簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ。本物のマクギル元老議員は残念ながら、既にメガ口湾の底だよ」

(やはりか……)

そう思っているとナギが突進し二人の男に止められた。

「強ええぞやつら！」

「だが生身の人間だ、ケリはすぐつく……」

俺はそう言っつて、ナギに答えを返した。

だが、アーウィルクスは随分狡猾な手を使った。

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！

……ああ、うむ、確かだ。奴等に暗殺されかけたッ……

は、早く救援頼むッ！スプリングフィールド、ラカン、ヴァンテン  
バーグ、バルク、奴等は帝国のスパイだった！

奴等の仲間もだ！今も狙われている、軍に連絡をッ……！」

(あっちゃあ、やられちまったな……)

「はあ……、やられたな……」

そう言っつて俺は頭を抑える。

「そうだな」

ガトウもやられたっつて感じの顔をしていた。

ナギ達は攻撃を仕掛けに行ったが、アーウィルクスの石の攻撃が  
家ごと壊したため攻撃をする事が出来なかった……。

……。そうして、俺達は帝国と連合両側から追われる身となってしまうた……。

「ナギ、俺は大陸の方で完全なる世界のマジト潰しながら行くぞ？」

「何でだ？一緒に行かねえのか？」

「お前らが姫さんの元になるべく早く着くための身代わりに俺がなる」

「なっ、危険だろ、それは！」

「俺の強さは知ってんだろ？」

「まあ、確かにそうだな、分かった。夜の迷宮で集合だぜ？」

「おう。分かってるよ、ナギ。じゃあな！」

そうして俺はナギ達と別行動をし夜の迷宮に向かうことにした……。

俺は、完全なる世界に関係する組織を片っ端に潰して回っていた。およそ20ほど潰したと思う。

「ここもか……」

「キサマ……破壊神か！？」

「そっ！此処も潰させてもらっぜー！」

「そうは、させるか！全軍発艦！」

そう言って、全兵力を俺に当ててきた。

「フン、この程度か…。」

そう言って、断罪の剣を出し、敵艦を落としていく。

そして、あつというまに全ての艦を落とした。

あまり規模は大きくなかったため比較的楽だった。

俺は上にいた奴等も倒し、情報が無いかを探していた。

……すると、途中で妙な部屋を見つけた。

（異様な雰囲気があるな…）

そう思った俺は、その部屋に入ってしまった…。

…すると其処には、捕まっている人達がいた。

その子達は、誰かが入ってきたと分かると目に見える程に震えていた……。

（一体何をされていたんだ……）

「助けにきた、大丈夫か？」

そう言うと、少女達は助かったみたいな顔をして、喜んでいた。

「ありがとうございます！」

そう言って、少女達は自らの家に各々帰っていった。

……一人を除いて。  
俺は、その少女に聞いた。

「どうしたんだ？家に帰らないのか？」

「……家はもうないの……。」

そう言った少女の目は悲しそうだった。  
その子の年齢は俺よりも2歳程若く見えた。

「そうか……。ならば、これからどうするんだ？」

「……あなたと一緒にいきたい……。」

そう言う、少女の目は潤いでいた……。

「分かった。おいで、一緒に行こう？」

「……うん！」

そう言う少女の目は、まだ悲しそうだったが少し嬉しそうでもあった……。

「俺の名はルーク・バルクだけど、君の名前は？」

「……私の名前はサラ・アーヴィングっていうの。」

「分かった。宜しくな、サラ」

「うん。宜しくね、ルーク？」

そうして俺は、夜の迷宮に向かう最中で新しくサヲを拾うのだった  
…。

## 大戦中（後書き）

### オリキャラ説明

サラ・アーヴィング

初めて出会ったときの年齢は3歳くらいである。

碧眼に藍色の髪 of 少女。

髪 of 長さは肩にかかる程度。

顔立ちはかなり整っているので将来は美女？な少女。一応、仮契約は行った。

得意魔法 回復系、防御系

アーティファクト

『カドウケウス』

能力

大体の怪我は回復可能だが、膨大な魔力を吸う。

サラの魔力だと致命傷を6回程治すのが限界。

また、石化や呪いといった状態異常もある程度なら回復可能。

ただし、かなりの強制力が働いている場合は、回復不可になる。

という感じです。

## 大戦終結（前書き）

いつもより少し長くて、駄文です。  
上手く書けなくてスイマセン。  
あと、また才子魔法でます。

## 大戦終結

俺達は今、夜の迷宮に向かって移動している。

因みに、サラとはあの後仮契約をしました。

いや、アレツスよ？

年齢的には二歳下なんでアリなんスよ？

ロリソってわけではなく。

………つと着いたな。

「久しぶりに暴れるには丁度良い場所だなアー！」

「………ルーク、張り切ってるね？」

「当たり前だろ！軽く戦闘狂になっちまってるしー」

そう言うと、サラは軽く引き気味な顔をした。

「………そうなの？」

「……いや、嘘！久しぶりに仲間に会えるからだよ！」

俺は慌てて、言い直した。

「そうなんだ？じゃあ、直ぐ行くぞー！」

そうして、俺達は戦場に降り立った。

「逝くぜエー！リ・ゲル・クラスト・カタストファイー。契約に従い我に従え、炎の霸王！来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣！ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄！罪ありし者を死の塵に！燃える天空！掌握！灼熱煉覇！」

そう言うのと、俺の体が炎のように燃え盛る。

「フハハハハ！逝くぜえ！炎砲！」

そう言うって、戦場の一部を火の海にする。  
そうしながら、どんどん進んでいくとナギ達に会った。

「ルーク！やつと合流出来たな！」

「おうよ！久しぶりだな！」

「相変わらず、反則みたいな技だな……。」

「気にすんな。諦めろ！」

そう話していたら、ナギは後ろのサラに気づいたようだった。

「ん…？ルーク、その子は？」

「ああ、サラ！挨拶！」

「はい！私の名前はサラ・アーヴィングです。よろしくお願いします！」

「ああ、よろしくな。俺はナギ・スプリングフィールドだ！」

「はい！よろしくです！」

うむ、丁寧な挨拶だ！実に良いぞ！俺は、サラの頭を撫でた。

「……………えへへ／＼」

「なあ、ルーク。一応戦闘中なんだぜ？」

「分かってるさ！」

実際今も炎砲飛ばして、敵陣火の海だしな！

「ってかもう終わったんじゃない？」

「……………早ッ！」

そう言った頃には、既に軍は壊滅状態になっていた。

（俺スゲーな！力馴染みきつたな！）

そうして、俺達は姫さんの元に向かった。

「よお、来たぜ姫さん。」

「久しぶりだな、姫さん！」

「遅いぞ、我が騎士」

そう姫さんはナギに行った。

そうして、俺達は姫さんと其処にいた第三皇女を連れて隠れ家に行った……。

～道中～

「ルーク～！久しぶり！」

そう言つて、ミーシャがこっちに飛び込んできた。

「うおっ！久しぶりだな、ミーシャ！」

「何で私も連れていってくれなかったの～！」

少しミーシャはキレてるようだ。

「うーん、気分？…それと、こっちが新しく仲間になったサラだ」

「よろしくです～！」

「よろしくね、サラちゃん！」

うん、何だか意気投合したみたいだ。  
良かった、良かった。

くオリンポス山、隠れ家く

何か今、第三皇女とラカンが言い合っているみたいだ。

「よお、お久しぶりだな、アル、詠春！」

「久しぶりですね、ルーク」

「久しぶりだな、ルーク！」

ホント久しぶりだよな。

そう思い、ラカンにも挨拶しに行った。

「よお、ラカン！久しぶりだな！」

「おお！ルークじゃねえか！お前帰ってくんのおせえんだよ！」

「気にすんなよ！色々潰して回ってたんだしさあ！」

「まあ、それもそうだな」

そう言って話してたら、第三皇女が俺達に言ってきた。

「貴様等、無視するでない！」

「ん、ああ、悪かったな。嬢ちゃん」



「ゲート！」

そう言っつて、戻ると丁度ナギが姫さんに忠誠を誓ってるところだった。

「まあ、アリな展開だな！」

そう言っつと、ラカンが俺の横に来て聞いてきた。

「今、叫びながら山消し飛ばしたのっつてルークか？」

「ああ、そうだぜ？」

「お前スゲエな……………」

そして、俺達は反撃を開始した……………。

それから六ヶ月……………。

この間、俺達は敵を潰して、味方を増やして、敵を潰して……………を繰り返した。

そして俺達は今、墓守り人の宮殿に来ている。  
まあ、最終決戦地つてとこだな。

「静かだな……………」

「まあ、そんなもんだろ、ナギ」

「そう言えば、ルークどうすんだ？」

何処で戦うかか……？

「うーん、俺達はいっぺん外で敵殲滅してから、向かうわあ〜！まあ、ソツコーですむから気にしねえでくんなあ！」

まあ、直ぐ済むだろ。準備しとこ！

「リ・ゲル・クラスト・カラストファイー。おお地の底に眠る死者の宮殿よ！我らの下に姿を現せ！『冥府の石柱』！術式固定！百重千重と重なりて走れよ稲妻！『千の雷』！術式融合！『雷神の鉄槌』！掌握！『雷帝石王』！」

そう言つて術式兵装をする。

「ルーク、お前毎回デタラメだな……」

「そうか？」

雷帝石王の力は、完全雷化と、石化の右腕である。石化の右腕に関しては、オンオフが可能だ。

「よし、行くぜっ！」

「おお！行くぜ！ミーシャ、サラ！」

「うん！」

そして俺達は戦場に出た。

「ミーシャ、右側頼む！」

「うん！」

俺達は自動人形と召喚魔を潰しにかかる。

俺は左側にいた敵に向かって雷化で瞬間的に移動した。そして、自動人形の一体を持ち、全力で自動人形の群れに投げ捨てた。

「オラアアアア!!!!」

自動人形の群れは潰れ、次に、召喚魔に近づき、石化の右腕を使い、召喚魔を石化させていく。

そうして、右側を潰し真ん中に向かい腕を構える。

「右腕解放！雷神の鉄槌！」

そう言うと、かなりのサイズの雷を纏った鉄柱が三本くらい真ん中に向かって飛んでいった。

そうして、俺達は殲滅を完了した。

「チィッ！手間かかったな！行くぞ、ミーシャ、サラ！ゲート！」

そう言って、俺達はナギの元に移動した。

しかし、まずそこに入って見たのは、アーウィルンクスと一緒に貫かれたナギの姿だった……。

「ナギイツツ!!」

すると、向こうから巨大な力が飛んできた。

ゼクトは『最強防護』を使い、俺とラカン、手で抑えようとした。ミーシャとサラを守るためにやったが、結局守りきれず、その一撃で右腕が肩からごっそり持っていかれた。

見ると、ナギ達の方はかなり重症のようだ。ミーシャは額を切っただけで、サラは足を骨折したようだった。

「……………仲間を傷付けたな……………許さねえよ、テメエ!……………最終ロック解除……………」

血へドを吐きながらそう言うと、丸で別人のように殺気が出る。

「……………サラ、回復頼む……………」

「…分かった!アデアット!『カドウケウス』。『完全治癒』!」

そう言うと、ルークの右腕が戻った。

しかし、かなり魔力消費量が高かったらしく、少し疲れているようだった。

「ありがとう……………サラ!自分も治して休んでな?」

「うん、分かった。……………絶対勝って帰ってきてね?」

「分かった!」

そう言って、俺はヤツに振り返る。どうやら、ナギとゼクトも戦っ

みたいだ。

「ナギ、ゼクト。俺今一瞬人捨てるわあ……!!」

そう言うと、ナギは驚いて止めようとした。

「ルーク!? 一体何をやる気だ! やめろ!」

(悪いな……ナギ……)

そう思いながら俺は、魔法を唱え出した。

「リ・ゲル・クラスト・カラストファイー。

黒天より出でし闇の王よ! 数多の血肉を喰らい、大地を引き裂き、空を引き裂け! 我が命に応じ、全てを喰らえ! 終焉おわりの力よ! 『全ての終焉』! 掌握! 『黒死終焉』」

そう言うと、ルークの体から黒い羽が生え、目は黒く染まり、禍々しい氣のようなモノを纏った。

「ナギ、ゼクト。ヤツを血祭りに上げルゾ!」

「ルーク、お前……。分かった! 行くぞ!」

血祭りと言うワケでは無いのだが、ナギとゼクトも協力することになった。

俺達は目の前にいたヤツを追い掛け先に進んだ。

見つけた瞬間、俺は全力で近づき、攻撃を加えようとするが先程の攻撃が飛んでくる。

「チイツッ！」

俺は体を反らし、回し蹴りを放つがいつの間にか移動していて背後から一撃を入れられそうになる。

だが、ナギが横から援護してくれたため、何とか助かった。

(やはり、完全に人間…捨てなきゃいかねえなあ…)

そう思っていると、ヤツの攻撃が来る。

「ルークー！」

「ナギイ！俺人間捨てるわあ、今だけだがな！『喰らえ全てを、闇の元に！』」

そう言い、敵の一撃を手で止める。

「グオオオオオオ！！！！……『掌握』！！」

そう言い、ヤツの一撃を掌握し力を更に足す。

そして、ヤツが反応できないくらいの速度で動き、一撃を放つ。

「グアッ！」

「まだまだまだア！」

そう言って、連続で攻撃を放ち、追い詰めて行く。

「ナギイ！片あ着けるぞ！」

「おう！」

「はははははは、私を倒すか人間！それもよかるっツ！」

「ダメレエエエエエ！！！」

そう言つて、更に追撃を仕掛ける。

「双腕解放！『全ての終焉』、『ヤツの一撃』！」

更に、双腕解放し敵を追い込む。

「ナギイ！止めは任せたツ！」

「オラアアア！！！」

ナギは杖を槍みたいなのにしてヤツに投げる。

槍はヤツにあたり、消滅していった……。

「グオツ……………！」

俺はその後すぐ肉体の限界が来て、意識を手放した……………。

## 大戦終結（後書き）

説明

全ての終焉<sup>おわり</sup>

当たった相手を分解させ消滅させる魔法。  
だが造物主には消滅が聞かず、ただの高エネルギー砲みたいな感じ  
になった。

## 大戦後（前書き）

主人公が壊れ始めました。  
何かすいません。



たりめーですぜい。  
なんせ、軽く化物越えるくらいツスからね？  
多分世界消せるよ？

「当たり前だろうが！その気になりゃあ、惑星ごと消し飛ばせるわ  
！！」

「お前って一体……けど、さっきの戦で人間「それ以上言うなああ  
アアアアアア！！！」……ゴメン、恥ずかしかつたんだな……」

「当たり前だ！我が人生最大の汚点だつつつの！！！」

「其処まで言うか………？」

「いや、汚点だね！寧ろこの会話知ってるナギの脳内今すぐ弄く  
つて、あの内容無かつたことにしたいね！」

「……それはやめてくれ！」

そう言っていると、ラカン達が来た。



何コレ、悲しすぎるんですが……………。  
俺はその後、魔法球の一つに入って、全力フルの一撃を食らわした。  
結果……………魔法球壊れた……………  
フツ―内部からは壊れんだろ…

それを見て、呆然としてたナギ達だった……………。

で、ナギ、ラカン、詠春、俺はその後、式典に出た。  
俺の位置はナギの横、ラカンの右前だ。  
歓声がかなりでかかったで軽くびっくりしてしまった…。

で、その後ナギ達と共に酒場に行ったら、めっさ色んな人に迎えられた。

ナギと同格くらいに有名らしい。  
アルに聞いた話だが、ファンクラブが存在するらしい。  
数はナギと同じかそれ以上あるという。  
かなりびっくりだ。

その後、写真も撮った。

で、暫くしたら崩壊が始まった……………。  
どうやら、世界を救うために、自らの国を滅ぼしたらしい。  
いま、俺達はナギ達と共に船に乗っている。  
クルトは向こう側にいるらしい。

「アリカ姫、クルト！時が来たら必ず助けに行く！それまで我慢している！」

そういつておいた。

その後、ナギが色々言っていたが、回線が切れ、話しきれずに終わってしまった…。

その後、アリカ姫は二年後に処刑が決定されたいらしい。

俺はその間、新魔法開発等を行うことにした。

結果から言おう……。

俺何でも出来んじゃね？

多重詠唱、高位魔法の無詠唱、融合魔法は勿論の事。

剣術の独流取得、マジックアイテムの開発、龍族の支配・眷属化、時の魔術「クロノス」の開発（使用はまだ）、全属性魔法の開発等も成功した。

二年の期間が経ち、俺達はアリカ姫、救出に向かった……。

そして、今アリカ姫が、ケルベラス渓谷に落とされた。

ちなみに、俺は兵の格好をしている。

（それにしても、暑いな……。ナギ、上手くやれよ……）

「よぉ〜し、こんなもんだろ？」

そういつてラカンが鎧を飛ばした。

ついでに俺も一緒に鎧を消し飛ばした。

「せ、千の刃のジャックラカン！？それに、破壊神ルーク・バルク  
！！？」

そう言ってるって詠春達も来た。

「青山詠春！アルビレオ・イマ！ガトウ！紅き翼……馬鹿なッ！！  
では谷底の女王は……」

「ざんね〜ん、ナギのヤツが行ってるぜ？姫には騎士ってな！」

俺はからかうように言った。

「ぐ…捕らえよ、反逆者だ！！谷底の二人も逃すな！！」

「おおっとやるのか？いいのかよその程度の戦力で？」

ラカンが発破をかける。

「フフ…その程度の戦力だと？愚か者が！このイベントの警備はここに見えるだけではない！周囲数十キロ二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している！いくら貴様らでもこれを……」

「はあ、その程度の戦力かよ……？」

俺を倒したいなら、千発くらい原爆でも使って見せろい！

「なっ…何!？」

「フハハハハ！！行くぜ！混合魔法！雷轟！！」

これは…アレだ、簡単に言つとエルのアレと同じ感じだ。  
雷と重力を併用した魔法である。

（あつ、大概倒し終わった…）

雷轟により、敵兵の9割が倒れちまった。

「お前…でたため過ぎるだろ……」

「俺だからな!!」

「「「はぁー……」」」

やめれ、その視線!

俺が悲しくなるだろ!

つてか、ナギのヤツアリカ姫とキスしてるな。

そうして、無事俺達はアリカ姫を救出した。

その後、俺とミーシャ、サラは色々な依頼をこなしていった。

ちなみに、俺の総資産8000億くらいになった。

ある意味資金もチートだね

ちなみに、ブラックカードは常に持つてるぜ!

そして、ある日事件が起きた。

丁度俺が17になったときだ。

その日、俺は時の魔法クロノスの使用を試してみようとした。

「リ・ゲル・クラスト・カタストフィー。時の神クロノスよ。我が盟約に従い、時を繋げよ！我が求<sup>われ</sup>は時<sup>もとむ</sup>への干涉！時へ干涉せよ時を支配する杖『ウルド』よ！アイオーン！」

俺の自作時空間魔法アイオーンを試した時だった。  
成功したのだが、座標を決め忘れた為に暴発し、俺達はそれに巻き込まれてしまった。

「しまっ…」

「ルークのアホー！」

そうして、俺達は時を飛んでしまった……。

## 大戦後（後書き）

オリ魔法

雷轟

雷と重力の混合魔法。  
威力は限り無く高い。  
その気になれば都市一つ消し飛ばせる。

アイオーン

時を操る魔法。  
簡単に言うと、タイムマシンの魔法版。

まだ出てないけど、説明。

独流

『やがいたぢネウリらじ  
躰融颯流』

基本的に技は居合いと風を切り裂く剣技。  
詠春に見せたところ唾然としていた。

神鳴流並に質が良く、技が強いが、後継者は出来ないくらいに扱いが難しい。

第一、今のところ後継者を作る気もない。

全属性魔法

『カオスアドミラル  
混沌提督』

全属性を合わせた小球を生み出す。

破壊力は雷轟よりも数段上。

当たった相手は、耐性がない為に素のままダメージを受ける。  
障壁貫通・ガード不可・無効化不可など色々な属性も持つ。

『集え！全ての力よ！その混沌たる器に全てを注ぎ込め！その力は  
全てを悉く打ち砕く、最強の一撃也！混沌提督！』カオスアドミラル

## 二つ目

カオスエンペラー  
『混沌霸王』

ビームに近い形状で、対障壁や魔術無効化不可など理不尽すぎる属性が付いた技。

見た目的に言うとブーチのセロっぱい。

『破壊と創造。希望と絶望。生と死。全てを混ぜ合わす混沌よ！その光は全てを無情にも、塵と化す一撃也！混沌霸王！』カオスエンペラー

麻帆良編（前書き）

本編すこし前から入ります。

麻帆良編

俺が目を覚ますと、草原だった。

おかしいな……。

さっきまで、山岳地にいたのだが……。

やはり、暴発のせいか……。

空間座標も移動していたみたいだった。

(媒体作るか……)

「ミーシャ、サラ？大丈夫か？」

「んっ……。あれ？ルーク？」

どうやら、二人とも少し眠いらしい。

「怪我は無いか？」

「うん、無いよ」

怪我が無いと聞き、俺は少し思案に走った。  
まずは……年代の確認だな……。

どうやら、今の年代は2002年の3月の終わりらしい。

(ならば、時期的に麻帆良学園に行くか……。幸い、あのぬらりひよんは知ってるし、エヴァとも少し面識があるしな……。)

「よし、麻帆良に向かうぞ、ミーシャ、サラ？」

「うん、分かった！」

少し、何で？みたいな顔をしてたが、了解の返事を取った。

「そうか。ゲート！」

その言葉を聞いた後、俺はゲートを開き、ぬらりひよんの部屋にいった。

「よお、久しいな？ぬらりひよん？」

「ワシ人間なんじゃが……。それにしても、行方不明と聞いてい

たのじゃが、何処にいたのじゃ？」

そう、聞いてきた。

かなり疑問のようだ。

「時間に干渉しようとしたら、時間跳躍しちまったんだよ……。」

「えと、頭がおかしくなったのかの？」

コイツ、サラリとムカつく事言いやがった……。

ぬらりひょん！俺を痛いヤツを見るみたいに見るな！

「ぬらりひょんに言われたくないわ！この長頭が！」

「ひ……酷い……。……確かに年齢が実際より若いみたいじゃし信じる  
とするかの。それにしても、用件はなんなのじゃ？」

べつぢから、ぬらりひょんは気にしてたらしい。

「ぬらりひょん、俺を雇ってくんね？」

「良いぞい！内容は…木乃香の護衛と、2 - Aの副担任、それと警備を任したいのじゃが良いかの？」

（詠春の娘か……）

「おう、全然OKだ、爺！……それと、このミーシャは教師で、サラは2 - Aに転入させたいんだが良いか？」

「私は何で教師なの！？」

どうやら、サラは自分が先生なのが、不満らしい。

「俺と同じ年齢だし、それがフツーじゃね？どうだ？爺？」

「それくらいなら、全然良いぞい！それと、すこし試験を行うが良いかの？」

「全然良いぜ！」

「ならば、今日の夕方に世界樹広場で良いかの？」

「オツケー！」

そう言って、俺はまたゲートで移動した。  
この後、俺は夕方まで媒体開発をしていた。

夕方まで真剣に媒体開発していた為、無事に媒体開発をし終えた。  
媒体は腕時計型で、腕時計に術式を施したため、言葉だけでアイオ  
ーンを使えるようになった。

……………じゃあ、行くか！  
俺はゲートで移動した。

「よお、来たぜ？」

そこには魔法先生、魔法生徒達が集まっていた。

「では、紹介するの。こちらは『破壊神』のルーク・バルクじゃ。」

（破壊神か……。ひでえ名だよな）

「……………なっ！……………」

全員ビツクリしているみたいだ。  
行方不明の筈だもんな。

……あ………、タカミチじゃん。

「よお、タカミチ。久しぶりじゃん！」

「ルークさん！今まで何処にいたんですか！？」

「ああ、ちと時間跳躍しちまってな」

そう言ったら、めっちゃ空気が冷たくなった。

え……？なに、いつてんのコイツ？

みたいな目で見えてきたのだ。

「ちと、試してやんよ？アイオン『時を進める』効果一分」

そう言うと、ルークは一分間世界から姿を消した。

そうして、戻ったら全員が驚いていた。

「まさか、本当とは思いませんでしたよ、ルークさん。相変わらず

貴方はでたらめですね……。」

「常識が通用しない！それが俺だからな！」

そう言うと、タカミチは溜め息をついた。

「そう言えばタカミチ？俺と相手すんだろ？」

そう言うと、タカミチは顔を青くしていた。

「ア……ハハハ……。本当にしなきゃダメですか？」

「ダメだ！本気で来いよ？」

そう言うと、ぬらりひょんが開始と言った。

言つてすぐに、タカミチは咸卦法を使い、居合拳で攻撃してきた。しかし、俺はそれを軽く避ける。

「フム……。ガトウと同じか……。」

「ハハハ……。初見で避けられるとは思いませんでしたよ……。」

そう言いながら、連打で居合拳を打ってくるタカミチ。

「なあ、タカミチく？剣使っていい？」

そう言いつと、タカミチは顔を青くして首を横に振った。

「じゃあねえな」

俺は、居合拳を軽く避けて虚空瞬動で一步で近づき、デコピンを放つ。

「オワッ……………」

滅茶苦茶な距離をタカミチは飛んでいった。

「あら、タカミチ大丈夫かな？」

すると、タカミチが何とか立ち上がった。

けれど、膝が笑っているようだ。

ちなみに、その光景を見た周りの奴等は絶句していた。

「ア……ハハハ……。やっぱり僕じゃまだまだ貴方には敵いませんね……。」

「いや、昔よりも強くなっていてビックリしたよ！一瞬マジで剣使うところだったし……」

「それは…僕が死んでしまつかも知れないのでやめてくださいね？」

そう言うタカミチの顔は笑っていたが、目は全然笑っていなかった。

「うーん、やっとこの『月影』の切れ味が試せると思ったんだけどな。おいしい！」

そう言って、何処から出したのか、刀を持ち残念そうにした。

「試さないで下さい！」

タカミチはスゴく動揺していた。

「臆鈍颯流の威力を試したかったのに……。」

ルークはそう言って、不満をたらたらにしていた。すると、横の魔法生徒が急に叫んだ。

「鶯黼颯流ですか!？」

「そうだが、どうしたんだ？」

「詠春殿が言っていた『神鳴流と同等かそれ以上の力の剣術』ですか!？」

「詠春のアホ、そんな事言ってたのか……。多分そうだが？鶯黼颯流は俺の独流で俺が初代だからな！」

「独流ですか……。良く自らで流派を作れましたね？」

「まあ、俺だからな！で、君の名は？」

「申し遅れてすみません！私の名は桜咲刹那です！」

「そうか、刹那。よろしくな！俺は、ルーク・バルクだ」

「よろしく願います、ルーク殿！今度剣術を見せてもらっても良いでしょうか？」

「おう、良いぜ！あ！そう言えば爺？合格か？」

「勿論合格じゃよ！」

「うじっ！」

こうして、俺は無事麻帆良での仕事を手に入れたのだった……。

麻帆良編（後書き）

感情って書きにくいですね…

書くの上手くしていきたいです。

しかも、タカミチが何かへタレっぽく………

## 登校地獄の解呪（前書き）

やはり、主人公性格変わり気味です。

## 登校地獄の解呪

俺が帰ろうとすると、エヴァに呼び止められた。

「おい、ルーク！なぜ貴様が此処にいるんだ！？」

「ん？ああ、エヴァじゃねえか。まだナギのアホ呪い解いてないのかよ……。」

俺はそう言っただけで盛大に溜め息をついた。

「私の質問に答えろ！」

「気分だよ、気分。で、そっちの子は誰なんだ？」

俺は、エヴァの横にいた子に聞いた。

「私の名前は絡繰茶々丸です。よろしくお願いします、ルークさん」

「ああ、よろしくな茶々丸！」

「私を無視するなああ！」

そう言って、エヴァは俺に蹴りかかってきた。

「おっと……、どうしたんだ、エヴァ？寂しかったのか？」

「子供扱いするなあアア！」

またエヴァは蹴りかかってきた。

「いや、だってエヴァ。幼女だろ？見た目が？」

「嫌い！殺す！！！」

エヴァは攻撃を仕掛けてくるが当たるわけもなく、俺はエヴァの首を持ち言った。

「で、エヴァ？何のようだったんだ？」

「そつだ！この呪いを治せ！」

「ヤダ。メンドイ」

「ふざけるなアアア！」

エヴァはじだばた暴れキレていた。

「じゃあ、考えておくとするよ。また明日にでも会いに行くから。  
……これで良いか？」

「仕方ない。必ず明日来い！」

「分かったっの……」

(あ ああ、めんどくせえ)

俺は、軽く投げやりに答えた。

「じゃあ、私達は帰るぞ！」

「失礼しました、ルークさん」

「ああ、じゃあな。エヴァ、茶々丸！」

俺は、エヴァと茶々丸に別れを告げたあと、ミーシャとサラのいるホテルに移動した。

「あ！ルーク。遅かったね？」

「サラか。すこしタカミチと手合わせしてたんだよ」

「タカミチさん、こっちに来てたんだね」

サラはそう言って笑っていた。

「今度会いに行くか？」

「うん！」

その後、俺は眠りについた…。

そして、次の日

「あれ？ルーク、何処行くの？」

「ミーシャ。俺ちと、ぬらりひよんに会いに行くよ。住む場所もらわないとな……」

「分かった」

俺はゲートを使ってぬらりひよんの元に移動した。

「ぬらりひよん！」

「ルーク君か。ちょうどいい時に来たのう。」

「何がだ？」

「ルーク君には、副担任の他に体育教師と数学教師をしてもらった事になったからの。それと、警備は今日から頼むの。」

「分かった。あと爺。俺達は何処に住めばいい？」

「女子寮の管理人の部屋が空いておるから其処に住むと良いぞい？」

「ああ、分かった。教師はいつからだ？」

「4月の始業式からでどうじゃ？」

「って、もう明後日だろ、それ…。まあ良い。ではな、爺！俺エヴァに呼ばれてるから行くわ」

そう言って、俺は学園長室をあとにした。

(軽く地形でも見ていくか…)

そうして、しばらく回った後、エヴァの家についた。俺は、インターホンをならした。

「どちら様でしょうか？」

「ルークだ。会いに来たぞ？」

そう言うと、茶々丸が出迎えてくれた。

「ルークさん。お待ちしていました。」

「おう、エヴァは何処だ？」

「こちらです」

そう言って、茶々丸は俺をエヴァの元に案内した。

「よお、エヴァ。来てやったぜ」

「遅い！」

(遅いって……。まだ昼なんだがな……)

俺がそんな事を思っていると茶々丸がお茶を運んできた。

「どうぞ、マスター、ルークさん」

「ありがとう、茶々丸！エヴァー！茶々丸くれ！」

気分で言ってみた。

それにしても、茶々丸ホント良い子やわ。

「やらんわ！」

「すみません。私はマスターの従者ですので」

「うーん、残念！」

「それより、さっさと本題に移すぞ！私の呪いを治せ！」

「やっぱりそれかよ……」。

「全く疲れんだよな」

「えー。治せるけどメンドイ」

そう言ったら、エヴァに肩を持って揺らされた。

「治せ、治さんか〜！」

(そんなに揺らすなよ……………)

「お願いします、ルークさん。マスターを治してはくれませんか？」

「うん、オツケー！」

そう言ったら、また肩を持って揺らされた。

「私と茶々丸で態度が違いすぎるだろうが〜」

(やめてくれ……………気持ち悪くなってきた……………)

「え〜、だって茶々丸良い子だし」

「理由になってないだろうが〜」

更に激しく揺らすエヴァ。

「茶々丸く、助けてく、吐きそう」

「マスター、それぐらいで止めないとルークさんの気が変わってしまいかもありません」

「チツ……………しかたないな……」

助けを求めたら、茶々丸が助けてくれた。  
ホント茶々丸良い子や

「エヴァ！茶々丸く「やらんわ！」「」

せめて最後まで言わせてくれよ……

「しゃあないなあ。ちと状態見るぞ？」

そう言って、状態を確認したが、適当すぎて面倒なことになっていった。

(うっへ、めんどくせえ。まあ、すぐ解呪できるんだがな……)

「じゃあ、解呪すんぞ〜」

「ああ。」

「えっと…………… ほら、コレで解呪終わったぞ?」

「本当にか!」

「ああ、魔力戻ったろ?」

「一応、周りにバレないように誤認識の魔法使ったいたがな……………」。

「ああ、戻ってる!戻ってるぞ!」

「エヴァ嬉しそうだな〜」。

「けど、学校は行かなきゃダメだぞ?」

「何故だ?」

「学校卒業しないと制限付きだからな？」

「制限だと？」

あ、少し苛立ってる……。

「学校外に出ると、力が極端に下がるようになる。」

「何だと！？ええい！解呪しろと言っただろうが！」

「だって、エヴァには学校卒業して欲しかったし……それに、俺が担当するクラスにエヴァが欲しかったからな！」

「そ…、そうか…／＼」

あれ、少し顔が赤い？

「エヴァ、熱でもあるのか？」

そう言って、自分の額をエヴァの額にくっ付ける。

「うん、熱は無いみたいだな…って、エヴァ？」

「な…、な…、何をするのだ！？／／／」

顔がめっちゃ赤いな…

「いや、気になったから…ね？」

「私は吸血鬼の真祖なのだぞ！？」

「関係無いよ、そんなの。化物でも人じゃなくても。エヴァはエヴァ、茶々丸は茶々丸、なんだからな！」

俺は本音で言った。

「フツ、変わったヤツだな…貴様は。」

「そうか？」

そう言っているエヴァは、何処か嬉しそうだった。

「変わってますね。」

「茶々丸にも言われた！俺そんなに変わってっかな？……」

軽くいじけるルークだった……。

## 登校地獄の解呪（後書き）

フラグへのルートがたった？  
って感じですか？

## 初警備

その後、夜になり俺は初警備をするために指定の場所へと移動した。

「此処か……。まだ、来てはいないし少し待つか……」

そうして、待っていると木の影から気配がした。

「其処の木にいるヤツ出てこい……」

そう言つと、刹那と褐色の肌の子が出てきた。

「まさか、バレるとはね……」

「流石ですね、ルークさん」

「今日の警備は二人となのか？」

俺は軽く疑問を感じ、聞いた。

「ああ、そうだよ。私は龍宮真名だ。よろしく」

「真名か。俺は、ルーク・バルクだ。よろしくな？」

その後、挨拶を交わし他愛ない話をしていたら、侵入者の気配がした。

「フム、侵入者か……。一体ほど爵位級がいるな……。」

「よく分かるね？」

「俺だからな！」

そう言ってゲートを開き、魔族の元に移動する。

「転移魔法が使えるとはね……。敵の数は50くらいかな？」

「うん、そうみたいだな、真名。今回は俺に任してもらっぜ？ 刹那俺の剣術見たい？」

「是非とも！」

刹那は期待の目で見てきた。

「よっしゃあ、行きますか！転移 目標 月影。」

ルークが横に手を伸ばし、何かを持つような動作をすると同時に、ルークの手元に月影が現れた。

「転移ですか。スゴいですね、ルークさん。」

「真名、あんま驚いてるように見れんぞ？」

真名の驚きは形式的なモノに見えた気がした。

「さして、行きますかね！」

そう言って、魔族達の中心に降り立つ。

「何者だ？汝からは強者の匂いがする。」

「我が名は、ルーク・バルク。貴様達を黄泉路へと誘う者だ！」

「面白い！やって見せよ、強者よ！我等は一筋縄ではいかぬぞ！」

魔族の一人がそう言うと同時に、回りの魔族達が襲いかかる。

しかし、ルークは刀を鞘に入れたまま腰を低くしているだけだった。

「  
臙黹颯流居合式序曲  
切月せつげつ」

そう言うと、一定の範囲内に入っている魔族の全てが消し飛んだ。

「なっ…!!」

其れを見て刹那は驚愕した。

なぜなら、その居合を刹那は目で追えなかったからだ。

「さて、お前等……。来いよ……。」

そう言って、棒立ち状態になるルーク。

しかし、魔族は先程の力を見て警戒しているのか、攻撃を仕掛けて

来なかった。

「来ないならば此方から行くでしょう！ 聽鼬颯流 一刀流序曲

煉月れんげつ」

そう言うと、自らの剣を高速で振り、空気のをねりを作り、ソレに少量の魔力を加え、炎の嵐を作り出した。

「グヌアアア！！！」

そうしたら、前方にいた魔族は全て炎の嵐に包まれ、強制送還されていった。

「フム、あと十人か……。」

そう言うと、一人の女性みたいな悪魔が前に出てきた。

「貴様かなりの強者だな……。我が汝の相手をしよう。我が名はシエラ・アスタロト。爵位は公爵だ。」

そう言ったシエラ・アスタロトと名乗る悪魔は、かなりの力を持っていることが見てとれた。

「公爵か……。良いだろう、アスタロト卿。お相手つかまつる。刹那！真名！残りの九人を片付けておいてくれ！」

「はい！」

「仕方無いね、了解したよ」

そう言うと、二人は残りの奴等と戦いだした。

「では、我等も殺り合うか、アスタロト卿！」

そう言って、ルークはアスタロトに切りかかった。アスタロトは軽く避け、軸足に蹴りをかまそうとしてきた。だが、ソレを回転して避け、アスタロトの頭に蹴りをくらわす。

「グオツツ！久しいな、我に攻撃を与えた人間は……。良いだろう！今持てる全力にて汝を殺す！！」

そう言うと、アスタロトは羽を生やし、姿を黒くし角を生やした。それと同時に、空気が一変し凄まじい殺気が辺りを覆う。

「なるほど…。公爵というだけの力はあるのだな…」

そう言った瞬間、アスタロトの姿が消え、背後から蹴りが飛んできた。

ソレをルークは手で受け止めるが、アスタロトの口から光が放たれ、ソレを直にルークはくらう。

「ガッ！！アスタロト卿、貴様には恐怖の一片を見せてくれよう！」

そう言うと、ルークの空気が張り詰める。

（まあ、本気ではやらんがな……）

瞬間ルークは姿を消し、アスタロトの後ろに現れる。そして蹴りを放った後、飛ばされる場所に移動した。

「躰融風流 一刀流奥義 風絶ふうぜつ」

そう言うと同時に、全ての風が吹き止み無風となった。だが、ルークの持つ月影の回りのみ風が渦巻いていた。ルークはアスタロトに月影を切りつける。

その瞬間、かなりの突風がアスタロトを襲い、吹き飛ばす。

アスタロトが吹き飛んだ後の大地は抉り取られ、アスタロトが当たった地面は大きなクレーターが出来ていた。

「グオオオオ！！」

そう言って、アスタロトは立ち上がる。

「コレでも立ち上がるのか……。ならば敬意を評し、我が力の末端の一つをお見せしよう。リ・ゲル・クラスト・カタストフィー。破壊と創造。希望と絶望。生と死。全てを混ぜ合わす混沌よ！その光は全てを無情にも、塵と化す一撃也！混沌霸王！カオスエンペラー」

ルークの指から黒い光が放たれ、アスタロトを貫く。貫かれたアスタロトは苦痛の声を上げた。

「終いだな。アスタロト。俺の勝ちだ。」

「フハハハハッ！！人間の身にて我に勝つ男がいるとは！！」

そう言って、アスタロトは高笑いをし始めた。

「お前も本気では無かっただろう？制限付きだったのは分かっている

るぞ?」

「「ええー!!」」

二人は驚きの声を上げていた。  
今回は、真名も驚いていたようだった。

「フツ……、それでも負けだよ。それに汝の加減具合から見ても勝てる気がしないのでね」

そう言って、アスタロトは笑っていた。

「そうか。俺もお前が気に入ったよ。『治療』」

「何故、敵である私の回復なぞ行う?」

そう言って、アスタロトは不思議そうにしていた。

「他意などない。ただ、お前が気に入ったから助けた。……また、俺に挑みに来ると良い。いつでも相手になろう。ただし、他者には迷惑をかけるなよ?」

「フツ……。面白い男だな。汝は……。ならば、またいずれか会おう！」

そう言うと、アスタロトは姿を消した。

「敵を逃して良いのですか!？」

「アイツは律儀そうなヤツだったからな?次からは俺だけを襲いに来る筈だ。」

そう平然とした顔でいった。

「危険では無いのですか!？」

「俺にかかれば、危険では無いよ。…それに、もしヤツが無関係の人間に手え出そうもんなら消滅させるからな!」

そう言うと、刹那は溜め息をついた。

「あ!そっぴゃ、どうだった?俺の剣技?」

「デタラメだったな……」

「余りの強さに驚きました！」

真名は呆れ、刹那は興奮していた。

「フツ……この俺！『剣帝』をなめるなよ！」

そう言ったら、刹那の目が更に輝いた。

「剣帝……ですか!?!」

「俺の通り名の一つだ！」

「ルークさん！私に稽古をつけてください！」

（……………何故？）

そう疑問に感じたが、完全に無視して断ることにした。

「え、嫌」

「お願いします！」

そう言って、涙目の上目遣いで俺を見上げてきた。

(やめてくれ！そんな目で俺を見ないでくれエエエ！！)

俺は諦めて刹那の稽古を承諾することにした。

「分かったよ…。」

「ありがとうございます！」

そう言って刹那は笑っていた。

「んじゃ、真名、刹那！帰りますか！」

「ああ、分かったよ」

「はい！」

そうして、初警備は終わったのだった……。

## 初警備（後書き）

何か刹那が壊れた気がします……………。

オリ技

切月

居合切りで円の範囲内にいる全員を切る技。

煉月

刀で空気のうねりを作り、そのうねりに魔力を入れる事で炎の嵐を作り出す技。

風絶

回りの大気中にある空気の流れを飲み込み、その一撃をくらわすことで、絶大なダメージを与える技。

質問

シエラ・アスタロトはこれから出しましょうか？

出さないとすべきですか？

回答期待してます！

ちなみに、回答が無い場合は出そうかなと思います。

## 2 A副担の俺(前書き)

今回は短めです。

キャラの書き方がムズい……………。

## 2 A副担の俺

今日から新学期。

俺の先生としての生活が始まる日だ。

俺は、上と下を紺色で揃えたスーツを来て、ネクタイは緩め、着崩した姿で学園長の元に来ている。

「爺。入るぜ？」

そう言う前に俺は入った。

「入ってから言われてものお……」

「気にすんな」

「分かったわい……。今日からタカミチ君のクラス2 Aの副担任として働いてもらうからのお？」

そう言って、爺は確認をとってきた。

「オツケーオツケー。了解だ。あと、俺魔法使いって今度来るヤツに教えたらダメだからな？」

俺は忠告を言った。

「分かっておるよ。それにしても、その服装はどうにかならんのかのお？」

「無理だな……」

そう言ってるのとタカミチが来た。

「おはようございます、ルークさん。それじゃあ、行きましようか？」

「ああ、分かった。いくぞ、タカミチ。ではな、爺」

そう言って、俺達は学園長室を出た…。

「着きましたよ、ルークさん。」

(此処が俺が担当するクラスか…)

「俺から入るわ」

「はい？まあ、分かりましたよ」

そうタカミチが言うと同時に扉を開く。

扉には黒板消しが仕掛けてあつたらしく、黒板消しが落ちてきたが、ルークは反射的に黒板消しを右足で蹴り飛ばした。

飛ばされた黒板消しは、壁に当たり、盛大な音を出した。

「…………ヤツベエ……。反射的にやっちまったよ……。」

俺は、手を顔につけ溜め息をついていた。

そうしていると、代わりにタカミチが話し始めた。

「この人が新しい副担任だよ。ルークさん、自己紹介お願いします」

「ああ、分かった。初めまして。今日から2 Aの副担任になるルーク・バルクだ。担当教科は、数学と体育だ。よろしく頼む」

そう言うと、空気が静まり返った…………。

ヤベエ、俺何かミスったか？

「「「「「キヤアアアア、カッコイイー！！」「「「「「

どうやら、取り越し苦労だったらしい……。

「せんせー、質問良いですかー？」

や、

「先生は、何歳なんですか！？」

とか、

「先生、彼女いますかー？」

とか、聞いてきていた。

つてか、いつの間にかポケットに入れてたケータイ無いし……。

そうして何も答えられずの質問攻めにあっていたら、赤い髪の女の子が纏め役みたいな感じで取り仕切ってきた。

「私、報道部の朝倉って言うんだけど、いくつか質問して良いかな？」

「ああ、良いぜ?」

そう言うと、メモ帳片手に色々聞いてきた。

「まず、年齢は?」

「17だ」

「外国人なの?」

「ああ、イギリス人だ」

「彼女はいるの?」

「いない」

とか、その他色々聞かれてそれに受け答えしていた。

「じゃあ、このクラスの中で一番好きなのは?」

その瞬間、クラスのヤツラの視線が集まる。  
視線が痛い……………。

「お前」

俺は、そう言っつて朝倉を指差す。

「「「おぉー」「」」

「えっ！？／／」

「冗談だ。今くらいの事で動揺してたら、良い報道者にはなれんぜ？」

そう言っつと、自分のケータイを持ち、タカミチの横に戻る。その後、しばらくしたのち一時間目が終わりを告げた……。

今日の学校が終わり、ぶらぶら歩き回っていると見た事ある顔を見した。

「よお、長瀬、古菲」

「ルーク殿ではないか。どうしたでござるか？」

(「いけるっ」)

「ルーク先生ネ。どうしたアルか？」

軽く、口調に驚いた俺だった。

「いや、見かけたから話しかけただけだ」

「そつでいけるか」

「ちょうど良いネ。ワタシと勝負するアルよ！」

何がちょうど良いんだろうと俺は思ったが、古菲はヤル気満々な顔をしていたので受ける事にした。

「長瀬もやるか？」

「そつでいけるな。拙者も参加するでいけるー！」

そう言つて、二人は臨戦態勢をとつた。  
俺は、何と無く気分で拳法擬きで戦うことにした。  
俺は、重心を低くし、構える。

「行くぞ……！」

その瞬間、俺は低く構え突撃する。  
一瞬で距離が縮んだのに驚いてか、一瞬古菲は反応が遅れた。  
その瞬間を見計らい、俺は古菲に掌打を放つ。  
古菲は軸をずらし、威力は抑えたが吹っ飛ばされた。  
長瀬は忍者っぽく分身して攻撃してくるが、俺はそれを避け、見定め、本物に向かい攻撃を仕掛ける。

「行くぞ、長瀬！烈破掌！」

烈破掌を打ち込まれた長瀬は数十メートル飛ばされた。  
そのすぐ後、古菲が突撃し攻撃を放ってくる。  
俺は、それを最低限の動きで避け、攻撃を仕掛ける。

「全烈破！」

古菲は吹き飛び気絶寸前までダメージを受けた。

「ワリイな、長瀬、古菲。大丈夫か？」

「ルーク殿は強いでござるなー」

「完敗ネ。ルーク、婿になるネ」

「はい？何故？」

俺は相当な疑問を持ち、古菲に聞いた。

「ワタシ強いヤツ好きネ。だからネ」

「いや、意味分かん。本当に好きなヤツに言えや、それは……」

そう言って、俺はその場を後にした……。

初授業、そしてテスト結果（前書き）

今回も短めです。

## 初授業、そしてテスト結果

次の日、俺は最初の授業をしていた。

教科は数学で、現在は連立方程式を教えている。

主に五人に…。

「さうて、明日菜？この説明で分かったかな？」

今は、今日の授業内容を終え、バカレンジャーに理解させようとしている。

ちなみに、明日菜の前にまき絵と夕映には教え、理解してもらえた。二人は5分で理解してくれたのだが、明日菜は5分たっても理解してくれない。

139

「今度こそは大丈夫よ！」

そう言って、ガッツポーズをしている明日菜。  
俺は試しに問題を出した。

「はい、これ解けるか？」

そう言つと、うんと頷いて考え始めた。

「……………分かった！ 〓 6 , 〓 2 ね！」

そう言つて明日菜は胸をはる。

「……………残念……………」

明日菜がミスったことに、少しといつかかなり肩を落とす俺。

「よし、明日菜？もう一回頑張るつか？」

そう言つて、俺はもう一回教え直した。

それを耳をすませて聞いているヤツラもいるので感心だ。

このあと、なんとか明日菜は理解してくれあと五分ほど時間が残り、次は古菲と長瀬の元に行く。

「はい！古菲、長瀬。やるつか？」

「あいあい、分かったでござるよ」

「分かったネ。頑張るアルヨ！」

そう言っつて、二人に教え始めた。

「　　　　　つとまあ、こんなもんだが、理解できたか？」

そう言っつて、問題を出す。

それを二人に解かせると、意外にも当たっていた。

「おおっ！古菲、楓！正解だ！」

あまりの驚きに呼び方が変わったルークだった。

「やったネ！」

「おお、やったでござるよ！」

二人ともかなり、喜んでいた。

特に、楓の方は軽く驚きも混じっていた。

「どうしたんだ、楓？」

「拙者、小学生の算数の時から理解が出来なかったのに、ルーク殿のおかげで理解できたでござるよ！」

そんな恥ずかしい事を普通に言ってくる楓。けれど、その言葉は少し嬉しくもあった。

「そうか、楓！ここから頑張っていこうな！」

そう言って、楓の頭を撫でる。

「あまり子供扱いはやめて欲しいでござるよ」

そう言う楓と同時に終わりのチャイムがなる。

「ん？おお、終わったみてえだな。じゃあ、今日はとりあえずこれで終わりな。…あと、次体育だから遅れんなよな？」

そう言って、俺は職員室に戻る。

その後、俺は準備をしグラウンドに向かった…。

「よし、集まったみてえだな？今日はとりあえず、運動能力の確認でもしようかな？」

「何をするんやー？」

そうやって、木乃香が聞いてきた。

「100メートル二本くらい走ってもらっただけだよ？」

そう言うと、まき絵が言ってきた。

「先生も走ろー？」

「分かった！じゃあ、俺に勝ったヤツ、これから授業真面目に受けなくても成績うな！」

そう言うと、全員目の色が変わる。

けど、明日菜が文句を言ってきた。

「ちょっと！？そんな事で成績決めて良いの！？」

「いや、この方がヤル気出るだろ?」

そう言つと、少し納得していた。

「まあ、それもそうね……」

そう言つたのでその後100メートル走つた。  
みんな真剣に走っていたので、俺はみんなの成績を努力点で上げて  
やるうと思つた。

「やっぱ四天王はええな……」

そう言つが、ルークは明日菜や春日よりも圧倒的に早かつた。

「ちよつと……早すぎよ……」

「皆残念だったな……。けど、お前達今日は良く頑張つたな!頑張つた功労賞として、お前達全員成績プラスだあ!」

「「「「「やつたあー!」「」」」」

そういつて全員嬉しそうにしていた……。

こうして、俺の初授業は終わったのだった……。

因みにこのしばらく後のテストにて、2 Aはやはり最下位だったが、数学に関しては一位だった……。

バカレンジャーの面々も数学に関してだけは平均70近くを取るといふ快拳を成し遂げたのだった。

…ただし、他はかなり低いのだが……。

## とある一日

俺が転任してから早くも3ヶ月がたった……。

今日は金曜で、明日からは3連休がある。

久しぶりにアイツラをどっかに連れて行ってやるのかな……と思っ  
ていた矢先、俺は運動部のヤツラに呼び止められた。

「先生！今度の休みなにか予定ある？」

「裕奈か。どうしたんだ？」

裕奈にそう聞くと、裕奈は笑いながら言ってきた。

「今度の休み、一緒に町にいこうよ！」

「ん？まあ、良いぜ？」

そう言うと、裕奈はやった！と喜んでいた。

「あーあと、亜子とアキラと、まき絵も一緒だから！じゃあね！」

そう言って、裕奈は走り去っていった。

(全く……慌ただしいヤツだ……)

「じゃあ、ウチラも行きますんで……」

「それじゃあまた……ルーク先生」

「ルーク先生、じゃあね」

「ああ、じゃあな？亜子、アキラ、まき絵？」

そう言って、俺は自らの寮へと帰っていった……。

そして、次の日……。

俺は、運動部のヤツラとの集合場所に向かっている。

ちなみに、格好は青のダメージ加工のジーンズに、元地が白で絵柄のついたVネック…という格好である。

これが似合いすぎてて、多少近寄りがたい感じになっている。

「よお、待たせたな？裕奈、亜子、アキラ、まき絵？」

「………／／」

四人とも放心していて、答えが帰ってこない。  
俺は、四人の前で手を振っていた。

「おい？大丈夫か？」

しばらくそれをしていたら、やっと四人は意識を取り戻した。

「遅いよ、先生！」

「ワリィワリィ、ちと遅れちゃった！………で、どこ行くんだった？」

「服を買いに行くんやよー」

亜子がそう答えた。

「そうか。分かったよ。じゃあ、行こうか？」

そう言って、俺達は移動した……。

で、現在四人が服を見ているわけだが……

「長い……」

どうして女の子ってのはこうも長く服を選ぶのかな……。  
そう思っていると、買いたい服が決まったようだ。

「これええな。何円や〜？……って、めっちゃ高いやん……」

そう言って、少し残念そうにする亜子。

「ん？どうした、亜子？ちょっと見せてみ？……この程度なら買ってもよっ。」

思ったよりも全然安かったので買ってやると言った俺。

それに亜子は遠慮し、よこにいた裕奈とアキラとまき絵は驚いていた。

「いや、悪いからええよー」

「遅れたお詫びだ！これで断る方がヒデエぞ？善意は受け取っとけよ？」

そう言って、亜子を説得する俺。  
横では、三人が固まっていた。

「「「ええええええ！？」」」

「どうした？三人とも？」

俺がそう言うと、三人はかなり驚きながら聞いてきた。

「コレかなり高いよ！？」

中学生から見るとかなりの高額であるその値段は、ルークから見ると安めの値段であった。

「そうか？裕奈もアキラもまき絵も選んで構わんぜ？勿論拒否権は無しな？」

そう言うと、裕奈とまき絵は嬉しそうに、アキラは申し訳なそうにしていた。

「アキラ？気にしないで選べよ？」

「でも……」

アキラはやはり後ろめたいようだ。

「アキラが遠慮すると、俺悲しいぞ？気にせず選べよ？金の事なんか気にせずにさ？」

すこし、強制っぽくアキラに言った。

「うん、まあ分かったよ……」

そう言ってアキラも服を選びに言った……………。

しばらくして四人が帰ってきた。

一人二着以上、四人で十一着で値段は十万にくらいだった。

「ゴメン、先生。ちょっと選びすぎちゃった!」

そう言って、勢いよく謝る裕奈。

「気にすんな、裕奈。お前達もうこんだけで良いのか?」

「うん!」

そう言って、まき絵が勢いよく頷く。

「なら、買いに行くか?」

そう言って、俺はレジに行きブラックカードで買い物を行った。

「ホレ!服だぞ?」

そう言って、個別に服を渡す。

しかし、四人は何故か固まっていた。

「……………さっきレジで使ってたのって……………ブラックカード？」

そう言っつて切り出す裕奈。

「???そうだが、どうかしたのか？」

「ルーク先生つてもしかして……………お金持ちなん？」

亜子が少し驚いたように聞いてくる。

「???さあ？貯金は8000億くらいあるけど？」

俺は頭の上にたくさんハテナを浮かばせながら言う。

「……………えええええ！？」

四人はかなり驚いた様子で絶叫した。

「どうしたんだ？四人とも？」

そう言って、また四人の前で手を振っていた。

「ウ……ウソやあ!？」

亜子はかなりびっくりしていた。

「???そんな驚く事か?別に俺は俺…だろ?」

そう言うと四人とも確かに…といって納得していた。

この後、さらに色々周り何やら色々奢らされ、その後帰ろうとしている時、ふと路地が目に入った。

すると、路地の方でうちの生徒　夕映とのどかと木乃香とハルナがなんか知らん男にナンパされていた。  
俺は、それを見てそっちに近づき始める。

「君達可愛いね?俺達と一緒にカラオケ行かね?」

「お断りです!」

夕映がきっぱり断わる。

「つれないね〜。良いじゃん、行くつよ?」

そう言って、のどかの手を持つ男。

「や、やめてくださいー!」

そう言って、振り払おうとすることが出来なかった。

「うおっ!?!この子、髪分けたらめっちゃ可愛いじゃん!……グハ  
アッ!?!」

そう言う男に、俺は横から一撃をかます。

すると、ソイツは思い切り吹き飛び、盛大に音を立て崩れる。

「嫌がってる女の子を無理矢理連れていこうとするのは……いただけ  
ねえよなあ〜」

そう言って、俺はその男達を睨む。

「なんだテメエ!カッコつけてんじゃねえよ!」



「ありがとな、助かったわ」

「ありがとうございます、助かりましたです」

「先生、ありがとう！」

「あの、ありがとうございます、先生ー。」

ちなみに、上から木乃香、夕映、ハルナ、のどかの順だ。

「別に良いぜ？困ったヤツを助けるのは当たり前だろ？……それに、お前達は俺の大事な生徒だ。困っているなら、直ぐに助けてやりたかったからな？」

そう言って、微笑むと四人は顔を赤くしていた。

この後、四人も合流し色々した後九人で帰っていった……。

この後、俺が帰った時ポストを見ると、魔法界からの依頼通知が来ていた……。

## とある一日（後書き）

次は、魔法界にて依頼を行います。

## シエラと合流（前書き）

今回はシエラを仲間にします。

## シエラと合流

俺はそれの次の日、学園長の元へ訪ね……脅している。

「魔法界から依頼通知来たからさっさと出張の許可出せ、爺？」

「分かった、分かったからその剣を収めてくれんかのう……」

そういう爺を更に急かし、出張許可を出させる。

「じゃあ、アイツラに言ってからさっさと魔法界行くわ？」

そう言っつて、俺は2 - Aに向かった……。

「よっしゃあ、ホームルームすんぞ〜」

そう言っつて、ホームルームを開始する。

そうして、ホームルームが終わりに近づいて来たので、俺は最後に出張の件を言っつてから行くことにした。

「あ！あと、お前達。俺今日から一週間くらい出張だから！」

「「「えええええ！？」」「」」

何か全員不満たっぷりみたいな目で俺を見ていた。

「なるべくはよ帰っからちゃんと勉強受けとけよ？」

「「「はい」「」」

何か元気がなさそうな声が聞こえたが完全に無視して、俺は魔法界へと向かった……。

……で、現在依頼を聞き終わり、悪魔の討伐に向かっている。

今回は只の悪魔討伐ではない。  
どうやら、爵位級が軍団を作ってるらしいので、それを壊滅させるために向かっている。

ちなみに、これまでに3日かかっていた…。

俺は、目的の場所に向かうと見た顔がいた。

……シエラ・アスタロトだ。

アスタロトは何故か他の悪魔に剣を向けられていた。

俺は疑問に思ったが、敵の悪魔の怒声を聞き、理由が分かった。

「アスタロト卿！貴様何故人間を駆逐するのに協力しない！？」

「意味がないが故だ。我は命のある人間に助けられた。故に、我は恩義を果たすが為に、人間を駆逐しない！」

そう確かに聞こえた。

どうやら、アスタロトは俺に助けられたから、俺が望まない『人間の駆逐』は行わないということらしい。

（全く……実に、恩義を返そうという思いが深いな……マジで悪魔かよ？）

「ならば、死ね！」

そう言つて、その悪魔が剣を振り落とす。  
俺はそれに瞬動で近づき、その剣を月影で受け止める。

「な、何者だ!？」

「我が名はルーク・バルク! 貴様達を駆逐しに来た『破壊神』だあ  
!」

そう言つて、月影をその悪魔に向け、アスタロトに言つ。

「無事か? アスタロト?」

「また…救われてしまったな…。我は公爵であるというのにこの失  
態は…。」

そう言つて、悔しそうにするアスタロト。

「破壊神か。我が名はグリード・グラシャ・ラボラス。誉れ高き公  
爵位が一人だ。そのゴミとは違い、我は不覚はとらんぞ?」

その男は、仮にも同族をゴミ呼ばわりにした。  
俺はそれが、どうしても許せなかった。

「あゝあゝ、ムカつくなテムエ……！同族をゴミ呼ばわりとは……。消えとくか？第一ロック解除……！」

そう言うと、俺は力の一部を開く。

その瞬間、禍々しいまでの殺気が辺りを覆う。

「懺悔は済ませたか……。処刑……執行だ……。」

そう言って、瞬間的に近付きグリードの両手を消し飛ばす。

「ガッ……アアアアアアアア……！」

「貴様は許さん……。臆鈍颯流奥義『宵之終』……！」

そう言うと、グリードは闇の中に包まれたようになり、その闇の中から叫びが聞こえたと思うと霧が晴れ、グリードは塵一片残さず消え去った。

「フン、終わりだ……。大丈夫か、アスタロト？」

そう言つて、俺はアスタロトの手を取つた。

「すまない……。一度ならず二度までも貴公に救われるとは……。この恩義いつか必ず返させてもらおう。……しかし、今はそれよりも先に彼奴達を倒すのが先決！」

「そうだな！行くぞ、アスタロト！」

そう言い、俺達は戦いを始めた。

「アスタロトは右を殺れ！」

「御意！」

俺達は二手に別れ、俺は左を討ち始める。

アスタロトも魔族の中ではかなりの強者らしく右にいた敵を難なく殺つていつている。

「躰黝颯流極意 『絶風獄死』」

そう言つと、風が鎌黝のように瞬間で通つていった。

かなりの速さで瞬間の出来事だったのだが、流星は悪魔の中でも爵

位を得る者達なのか、傷は負ったが致命傷は避けたようだ。

しかし、力の一部を解放したルークがこの程度な訳がなく……悪魔達が逃げたその先には、ルークの魔法 雷轟が既に目の前に迫っていた。

「しまっ……グワアアアア！」

そう言って、数十の悪魔共が雷轟の爆発に巻き込まれ、塵と化した……。  
それでも、それから逃れた五体程がいた。  
その悪魔達はルークに襲い掛かる。

「臙舁颯流居合恩義『神切』」

そう言って、空気が静まると同時に空間ごと全てを切り裂いた。

「終いだ……。さて、アスタロトは終わったか？」

そう言って、アスタロトを見ると、アスタロトは敵の頭を持ち、投げつけ一ヶ所に集めたあと、高密度の気弾のようなモノを放ち消し飛ばしていた。

「終わったようだな、アスタロト。これからお前はどつするんだ？」

「我も既に此処まで行えば、魔界からも賞金首の身。故に我は此方に残る」

「そうか…。ではまた会うときにな…」

そう言って、手を振り、去ろうとするとアスタロトに呼び止められた。

「我は貴公 いや、ルークに着いて行くぞ？良いであろう？我はルークに恩義を返したいのでな…」

そう言うアスタロトに少し驚き、そして悩んだ末に連れていく事にした。

「…分かった。元よりこの状況は俺にも原因があることだからな…。良いぜ？一緒に来いよ？」

そう言って、アスタロトを連れていく事にした。

「フツ……では、ルーク。我の事はシエラとお呼びください。それと…仮契約をいたしましょう！」

その言葉に俺は、かなりビツクリした。

しかし、アスタロト　シエラの顔は反論は許さないと顔だった。

俺は、それを見たら諦めるしか無いと心に踏ん切りをつけ、仮契約を結んだ。

「仮契約は久し振りだな…。十年振りか…。」

そう言うと、シエラは驚いていた。

「そんなに久しかったですか？ルークはかなり仮契約を行っていると聞いたのですが……。」

「いやいや、俺まだ二人しか仮契約してないぜ？」

そう言うと、シエラは笑っていた。

「ハハハハッ！ルークは意外にも奥手なのですね？」

「全く…、ホレ仮契約カード。それと、認識誤解の魔法かけといたから！」

ルークはシエラに仮契約のカードを渡し、認識を間違えさせる魔法を掛けた。

「有難い。では、ルークのいる麻帆良へと帰ろうぞ」

「ああ、そうだな。……それと、口調変えるよ？」

「善処するよ……」

そう言うシエラと共に、ゲートを開き麻帆良へと帰るルークとシエラであった……。

## シエラと合流（後書き）

### キャラ説明

シエラ・アスタロト

身長 170？

体重 内緒

銀髪の腰まであるロングヘア。

純血の悪魔で、普段は力を抑え、ルークと共にいる。

性格は意外にも楽道家、お調子者っぽい一面もあるため、騒ぎを作るのが得意。

弄るのが好き。

アーティファクト

『グングニール』

投擲すると何処にいても必ず、当たる槍。

ただし、音の速度以上の場合には避けられる。

普通に使ってもかなり固い槍なので、壊れる事はほぼ無い。

## 仮契約追加

そうして、俺達は帰り、現在爺の元に来ている。

「なあ、爺？こいつ転入させて良いかな？」

「ええよ？」

（早ッ！！）

俺は、余りの早さに驚き、シエラは軽く引いていた。

「じゃあ、自己紹介な……シエラ？」

「我……じゃなくて、私の名前はシエラ・アスタロトです。よろしくお願いしますね？学園長殿？」

意外にも、ルークとの約束を守ろうとするシエラ。

「よろしくのう、シエラちゃん？」

そう言っつて、シエラと爺は握手していた。

で、シエラには住む場所が無いので、現在寮の管理人室に来ているのだが……。

「ルーク？この女誰？」

「えーと、公爵級悪魔のシエラ・アスタロト。明日から、うちのクラスに転入になるんだよ」

そう言っつたら、ミーシャは何故か怒っていた。

「何で悪魔を連れ帰ってきてんのよ!？」

「いや、コイツ魔界から追われてんだわ。人間救おうとしてさ……」

そう言っつと、更にビツクリした顔をした。

「そうなの……。なら、仕方無いわね……」

そう言ってミーシャは納得していた。

「じゃあ、俺今から警備だから行くわ？」

そう言って、俺は警備に向かった。

何故か背後にシエラが付いてきていたが…。

「ルーク。今のがルークの仮契約の相手なのか？」

「ん？ああ、そうだが？」

そう言つと、シエラはふうんと言って口元を吊り上げていた。

「なら、アレで仮契約相手が全員なんだな…」

そう言って話している間に、刹那と真名の元へ着いた。

「よお、刹那、真名！久し振り〜」

「ルーク？いつ着いたんだ？」

「ルークさん！出張お疲れ様です！」

そう言つて、二人は話し掛けてきた。

どうやら、二人とも俺が本当に出張だと思つてたみたいだ。

「さっきだよ？それと、明日から2 Aに転入するシエラだ。挨拶よろー！」

そう言つと、刹那と真名は絶句していた。

「シエラ・アスタロトです。よろしく？」

そう言つと、刹那が叫んだ。

「何故、あの時の悪魔が！？」

「あゝ、仲間になったんだわ？で、現在魔界から追われてんだわ」

そう言つと、真名がいつも通りに戻つて聞いてきた。

「何故、追われているんだい？」

「いや、人を守ろうとして、お尋ね者になったんだわ（正確には、俺への恩義を果たそうとしてだが）」

「そうなんですか……。分かりました。」

刹那は少し考えた後、了承した。

真名も、どうやらオツケーみたいだ。

「じゃ、俺ちと見回ってくるから、適当に話してな？」

そう言っつて、俺は見回りに言った。

その最中、50程の悪魔を倒し、戻っていくと……

「「ルーク（さん）！仮契約して（くれ／下さい）」」

と二人に言われた。

その目は、完全に反論を許さないという目で、何故かと思いシエラを見ると仮契約のカードを持ち、口元を吊り上げていた。

(お、お前かあああ!?)

俺はそう思い、やられた…と肩を落とした。

「分かった。やろうか？」

そうして、俺は刹那と真名と仮契約を交わした。  
シエラの陰謀によって……。

そして、次の日……。

俺は、いつもどおり学園に通勤していると、変な噂が耳に入った……。

曰く、俺はとある国の王子。

曰く、俺は大財閥の跡取りor社長

という噂だった。

全く的外れにも程があるな…と思いつつ、俺は教室に入りホームルームを始めた。

「皆、久し振りだな？」

「……久し振り！ルーク先生！」「……」

そう言って、嬉しそうに挨拶する皆。

「さーで、今日は転入生を紹介するぞ、入れー」

「始めまして。私はシエラ・アスタロトです。よろしくお願ひします」

そう言って、挨拶するシエラ。俺はシエラがマトモに挨拶した事にビックリしていた。

そして、毎回のごとく朝倉の質問攻めにあっていた。

「シエラさんとルーク先生の関係は？」

おい、待て、朝倉？

何故そんな質問を聞く？

「私はルークの許なず……」「うおおおい！？」

（何を言っちゃってんだ、コイツは！？）



「ルーク殿？仮契約お願いできるでござるか？」

( 一体何を言ったら、こんな積極的になんだよ… )

そう思いながら、俺は返事をする。

「良いぜ。古菲、楓」

そう言い、楓にキスをする。

すると、楓は急で驚いたのが、固まっていた。

次に、古菲にもキスをしたのだが、やはり固まった。

「仮契約完了か…。てか、あのバカ、何言ったら全員こんなに積極的なんだよ……」

暫くして、二人も復活したので仮契約のカードを渡す。

「はいこれ。来たれ(アダット)つつつと、アーティファクトが出せるぜ？」

そう言いと、二人ともそのカードを見た後に言う。

「アデアット！」

そう言うと、古菲は神珍鉄自在棍を、楓は何か分からん黒い布を出した。

その後、楓は黒い布に包まれたと思ったら消えた。

どうやら、隠れ蓑みたいなものらしい。

「驚いたでござる。中にはキッチン付きの家があったでござるよ！」

どうやら、楓の蓑の中には家があるらしい…。

とりあえず、その後、俺は管理人室に戻りシエラに拳骨をくらわしておいた。

「痛い…ルーク…」

「もう悪さは止せよ？今日どんだけ疲れたと思ってんだ？」

そう疲れたように溜め息をつく。

「分かった……」

意外にもシエラはそのまま従ってくれたのだった……。

## 仮契約追加（後書き）

仮契約増えました！

刹那、楓、古菲のアーティファクトはネギの時より質が良くなっています。

真名のアーティファクトは

『アストラナガン』

能力は、変形銃の双銃。

そして、かつ弾はルークの魔力を使う為、トリガーハッピー状態。撃ち放題の為、アデアットした時は軽く近寄れない。

ネギ参入（前書き）

一気にネギが入るまで飛びます。

## ネギ参入

アレから、色々あった…。

2学期終わりにはサラが転入したり、刹那と手合わせしたり、依頼受けたり、遊んだり…と色々あった。

で、今日からネギが先生として来る。

俺は、ネギを迎えに来ているが………

何故か知らんが、アスナに掴まれていた。

「おいおい、どうしたんだアスナ？」

おれは、アスナに聞く。

「このガキがテキトー言ってきたのよ！」

「何って言ったんだ？」

俺は、原作の主人公 ネギに聞いた。

「何か占いの話が出てたようだったので、結果を教えただけなんです」

「へえ、結果って？」

そう言つと、ネギは言った。

「えと、失恋の相が出ているって言ったんです」

(はああ、それ言っちゃダメだろ…)

俺は、ネギをからかう事にした。

「少年？お前には人難の相が出ているぞ？今探している人には会えない」

「え！？ふざけないでください！」

そう言つて、ネギがキレた。

「まあ、冗談だがな。コレと同じことだ。お前がアスナにしたのは自分がどれだけヒデエ事言ったか、分かったか？」

そう言うと、ネギは素直に頭を下げ、アスナに謝った。

「悪いな、アスナ？許してやってくれや？」

「……しょうがないわね」

アスナはしぶしぶ許してくれたようだ。

「さて、君がネギ先生だね？俺は、2 - A 副担任のルーク・バルクだ。以後、宜しく頼むぞ？」

そう言うと、ネギは勢いよく返事をした。

「はい！宜しくお願ひしますね、ルークさん！」

「え？先生？」

木乃香が疑問そうにしていた。

「ああ、ネギ挨拶な？」

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです…」

「えええー！？」

やはり、ネギが先生という事に驚いていた。

「お久しぶりでーす、ネギ君！」

「久しぶりタカミチーッ！」

「やつ、タカミチ元気だねえ？」

俺とネギは、タカミチと挨拶した。  
で、少しだけ挨拶を交わした後、めいじひょう学園長に会いに行った。

「それにしても、修行で学校の先生とはもう、大変じゃなー」

「は、はい。宜しく願います」

そんなフツーに会話を進めていたら…

「ところで、ネギ君には彼女はおるかの？どっじゃな？うちの孫娘なぞ」

そう言うと、木乃香にトンカチでツツコミを入れられていた。

(全く何言ってるんだか…)

そうして、また話が進み…

「このか、アスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？」

「え！？…ルーク先生の部屋はダメなんですか？」

ネギがそう聞いてきた。

「ああ、ウチはムリだわ」

「何だよ？」

アスナが聞いてくる。

「つてか、理由知らなかったっけ？」

「俺の部屋にはミーシャにサラ、それにシエラが住んでるからな……」

「「えええー！？」」

アスナと木乃香が驚く。

「そんな驚く事か？」

「つてか、ネギが先生と分かった時より驚いてるってどうよ？」

「何で住んでるのよ？」

「イヤ、アイツ等が俺の部屋が良いって言ったからだけど？」

「フツーに答えたら溜め息をつかれた。」

「ってか、アスナ、木乃香？はよ行かんと遅れるぜ？」

そう言うのと、二人は挨拶してから走っていく。

「さて、ネギ。行こうか。あと、コレクラス名簿だから」

そう言うって、クラス名簿を渡す。  
で、クラスに着き……。

黒板落としが落ちてきた。

それを俺は軽くキャッチする。

しかし、ネギが罾にかかり、バケツを被り矢を当てられ、教壇に当たった。

「やれやれ」

皆は、上手いくらい方をしてたので、笑っていたが子供と分かり、駆け寄って心配していた。

「コイツが新しい担任だ。ネギ挨拶！」

「えと、あの……今日からこの学校でまほ……じゃなくて、英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。三学期の間だけですけどよろしくお願いします」

(おい、お前今魔法って言いかけやがったな?)

そう思っていると、歓声みたいなのが聞こえ、ネギは囲まれた。

「……マジなのか？」

千雨が話し掛けてきた。

「ああ、マジだぜ？ありゃ、軽く違法だよな？」

そんなことをしばらく千雨と話してた。  
どうやら、俺も違法らしい。

「ルーク先生。アイツラ止めなくて良いのか？」

「良いんじゃないか？流石にヤバイことはせんだろ？」

幼児虐待になるからな？

「まあ、確かにそうだろうが……」

そう言っていると、委員長が止めに入った。

そして、アスナとケンカを始めた。

俺は、しょうがないので制止に入る。

「さーて、お前等。ストップだ。さっさと授業始めんぞ？」

そういうと、ケンカは止まり、授業を始める。

そうして、しばらくするとアスナが消しゴムを飛ばしまくる。

「アスナ、随分楽しそうなことしてんな？」

「ルーク先生……！ってか、先生楽しそうって……」

そう言っていると、委員長が何かネギに小声で話す。

それが聞こえたのか、アスナはペンケースを委員長に投げつけ、ケンカが始まる。

「おいおい、ケンカすんなよ？」

そうやって、俺はアスナと委員長の手を掴み、離れた。

それと、同時にチャイムが鳴り授業が終わる。

その後、ネギとアスナがまた一悶着有った……。

そうして、今日の授業が終わり、大量の本を持つのどかに会った。

「よ、のどか！本大量に持って大変だな？持つぞ？」

そうやって話し掛けると、驚いたのか足を挫き転びそうになる。

それを俺はのどかを抱き抱え、本を足で全て受け止める。

「のどか？大丈夫か？」

そう言うと、のどかは顔を赤くしていた。

まあ、抱き抱えられりゃ、顔も赤くなるだろうな。

「え、あ、はい、ありがとうございますー」

「さて、俺半分持つぜ？」

そう言って、半分持ちのどかの足に怪我がないか調べる。  
どつちら、怪我は無いようだ。

「いえ、悪いですよー」

「気にすんなって。俺がやりたいだけだからな！」

その後、説得しのだかと本を持っていく。

「ありがとうございますー」

「気にすんなよ？」

そう言ってる間に着いた。

「ルーク先生。教室でネギ先生の歓迎会をするんで行きましょー」

そう言って、連れていかれた……。

そして、現在……。

ネギ達も来て話していた。

なんか、ネギがタカミチに読心術をしていた。  
アイツ、マジで魔法秘匿する気ねえだろ？

ちなみに、俺はサラ、シエラ、楓、真名、刹那、古菲、そしていつの間にかミーシャも来て囲まれていた。

「で、何でお前等囲んでんの？」

そんなことを言っていると、エヴァに茶々丸も此方に来た。

「何でお前等がルークの回りを囲んでいるんだ？」

「『従者だからよ／＼でござる／＼だ』」

二人に聞こえる程度に全員が八モる。

「なにいつ！？」

エヴァはかなり驚き、睨まれた。

（何故に睨む？）

「ルーク、本当か？」

「いや、そうだけど？」

そう言つと、理由を聞かれた。

「何故だ？」

「してくれって頼まれたからだか？」

そう言つと、少し考えて言つてきた。

「今度私とも仮契約しろ。拒否は許さん」

「……………オツケー」

こうして、俺は変な約束を取り付けられたのだった……………。

## ネギ参入（後書き）

ネギがのどかのアレ無しで何故魔法がバレたかは……、違うクラスの生徒が足を挫き落ちそうになったため、魔法を使い助け……って感じですよ。

のどかの役を知らない誰かがこなした感じですね。

**授業と騒動(前書き)**

うーん、キャラがおかしい……

## 授業と騒動

次の日…。

俺は、いつものように学校に通勤した。  
で、今は英語の授業を後ろから見てるのだが……。

(アイツラ元気だねえ)

現在ネギがアスナに英語の訳の問題を当てていた。

(アスナは英語苦手なんだな…。上手い具合に分かるようになってくれると良いんだけど……。今度にも一度教えた方が良いな?)

「アスナさん英語ダメなんですわえ」

ネギがそう言ったのが聞こえた。  
俺は、ネギの後ろに近付く。

「アスナは英語の他にも国語理科社会も苦手です」

どっかからそんな声が聞こえた。

「要するにバカなんですわ。良いのはルーク先生が担当の数学と保健体育くらいで」

委員長が言う。アスナは顔を赤くしていた。  
俺は、ネギに拳骨をくらわせた。

「あいたっ！？ルークさん痛いですよ」

「痛いですよ〜じゃねえって。お前今さっき言ったこと復唱してみろ」

俺は、ネギに諭すように言う。

「え…？あいたっ！？ルークさん痛いですよ…ですか？」

「その前だ」

ネギがお馴染みな間違いをする。  
少しイラッときたがそれは抑えとくってことで。

「アスナさん英語ダメなんですわねえ……ですか？」

「それだ。お前の言った『ダメ』はなあ。ソイツの可能性を潰す言葉なんだよ。例えば、中々上手くならないがある程度の努力をしているヤツがいるとする。ソイツにその努力していることで『お前はダメだな』と言ったら、どうなると思う？」

説教モード（少し）に入る俺。

「えっと…落ち込みますね」

「そうだ。そして、ソイツは努力する事をやめるだろうな。『俺はやつても出来ないんだ』ってな。で、ソイツの可能性は潰れちゃうワケだ。コレは、勉強とかでも同じだぞ？ 実際俺はアスナの事『少し勉強が苦手なだけで、俺が上手く教えられれば出来るようになる』と思っているぞ？」

そう言って、アスナの頭を撫でる。

「確かにその通りですね。すみませんでした、アスナさん」

ネギは頭を下げ謝った。

「このとおり、ネギも謝ってるし、許してくれないかな、アスナ？」

「しょうがないわね…。目の前で説教されたら、怒るに怒れないわよ」

「説教じゃない！諭しただけだ！」

敢えて言い方を変えてみた。

（ネギは配慮の精神を持たせなくてはダメなのかな。けど、子供だしなー）

そんな事を考えながら、後ろに戻る。

しばらくした後、ネギが何か液体を持ってきた。

（何の液体だ？）

俺は、二人に近付く。

「ネギ、アスナ。お前等いつも楽しそうだねえ」

「何処がよ！……そうだ！今ネギが飲み物持ってきたんだけど飲む？」

(俺には、楽しそうに見えるんだけどねえ……)

「おう、飲ましてもらおうとするか」

そう言っただけで飲み干す。

あんま美味しくは無かった。

寧ろ不味かった。

「ホラ、なんにも起こらないじゃない」

「何がだー？」

軽く疑問だ。コレ飲んだら何か起きるのか？  
ちなみに、ネギはおかしいなーって言ってた。

「ルーク先生なんかスゴイかつこえーな！」

木乃香はそう言ってすりついてきた。

木乃香の目は虚ろだったので、何の液体かが分かった。

(チイツ！惚れ薬か！？しかし、ネギ程度の魔法使いなら、効力は数時間の筈。その間、何としても逃げ切らなくては……。)

そう思った瞬間、向こうに仮契約組が！

しかも、オマケにミーシャ、サラ、シエラの特に最強組もいる！

(ヤバい！死亡ルートだあ！？)

俺は、全力で反対方面に回転し、走ろうとするが……

「あーっ！ルークー！」

ミーシャが叫ぶ。

(ヤメテ！今だけは…今だけは近付かないで！)

「ルーク。何故逃げようとしておるのだ？」

シエラが聞いてくる。

そして、無情にも7人は近付いてきた。

そして…、7人とも惚れ薬の効果にかかった。

「助けてアスナ！7人の目が凄く怖いよ！」

アスナに助けを求めるが…

「ゴメン、私も7人の目が怖い！」

「ネギイイイイイ！？」

俺は、ネギに対し恨むように言葉を発し、全力で走り出す。

「「「待て！逃げるなあああ」「」「」

怖すぎる！

つてか、目が虚ろじゃない！

何か獲物を刈る目だよ！

そうして、俺の地獄が始まった…。

「ウワアアアアア!?」

俺は、現在絶賛爆走中だ。

「逃げるなあ!」

そう言って、銃を放ってくる真名。

「神鳴流奥義『斬岩剣』!」

刹那は神鳴流を使ってくる。

(っつて、おい!?何で、奥義使っんだよ!神鳴流使ったらダメだつて!)

「待つでいじめるー!」

楓は分身しつつ、囲んで攻撃してくる。

「待つアル！」

古菲は連打で更に追撃。

「マジキツイ！ヤベエ、コイツヲ殺る気満々だった！」

俺は、叫びつつもなんとか避ける。

「ルーク！待ちなさい！」

ミーシャはいつの間に出したのか、煉獄の劔を持ち切りかかってくる。

「ルーク！止まってよ！」

サラは咸卦法を使い、本気で殴ってきた。

「ルーク！何故止まらないのだ！」



手を誰かが掴み、引っ張ってくれた。

「誰か知らんが有り難う！…ってアスナじゃん！」

「大きな音がしたと思ったら…アンタだったのね」

アスナは大きな物音を聞き、助けに来てくれたらしい。

(ん……？大きな物音？)

………

「アスナ、避けるぞ！」

アスナを抱え横に飛ぶ。

すると、さっきまでいた場所にクレーターが出来る。

「アブねえ…。ってか、お前等！コレ見られてどうすんだ！？」

「大丈夫だよ？人払いも、認識阻害もちゃんとしてるからね？」

そう言い、サラが近付いてくる。

「ヤバい！咸卦法！サラバ！」

そう言い、アスナを抱えたまま、全力で屋上に走り逃げていった。ちなみに、認識障害は完璧だ。

「何とか逃げ切った……」

「……ルークも、もしかして魔法使いなの？」

(しまったああああ！？ネギにバレてしまつうううう！)

よし、アスナを口止めしよう……。

「確かに俺は、魔法使いだ。しかし、この事はネギには内密に頼むよ……」

「何でよ……」

「いや、ネギが俺魔法使いだと分かると、甘えて修行になんないからかな？まあ、時期が来たら教えるからさ？待ってくれないかな？」

アスナに必死に頼む俺。

「分かったわよ」

「有り難う！アスナ！」

そうしてる間に効果が切れ、逃走劇は終わりを告げたのだった……。

## 授業と騒動（後書き）

何故かアスナに魔法バレしてしまった！

アスナかのどかかどちらかで悩んだけど、のどかにバレるのはもつと違う形が良かったから、ネギの件で魔法を知っているアスナに決定しました！

ネギ来たら今までバレてなかったのにバレるとか……

なんたる疫病神（苦笑）

それとも、トラブルメーカー？

補修と戦い（前書き）

原作と随分変わっています。

話がグダグダに……

## 補修と戦い

次の日……

ネギは今回の補修を受け持ち、俺は補佐として来ている。

「というわけで、2・Aのバカレンジャーがそろったわけですが……」

「誰がバカレンジャーよっ！」

(バカレンジャーって全く抜けた名前だよなー……)

そう思っている間に、小テストが始まった。

すると、直ぐに夕映がテストを提出する。

点数は9点。ただ勉強が嫌いなだけのタイプなんだな……。

次に、楓、古菲、まき絵が来たのだが……

「お前等……。楓、古菲。此方来い。大体教えてやる。まき絵、アスナは一辺ネギに教えて貰ってくれ」

「分かったでござる！」

「分かったアル！」

そう言って、二人を連れていき…

「さて、始めようか…。まず此処がこうなり　　こうなるわけだ。  
あと　　こうなる。で　　という感じだな。理解できたか  
？」

かなり省いてはいるがちゃんと教えた。  
で、もう一回小テストをすると、楓が10点、古菲が9点だった。

「合格だ！古菲、楓良くやったな？」

そう言って、二人の頭を撫でる。

その後、アスナの点数を見たワケだが…

「1点か……。次は、俺が教えよう。ネギは少し其処で見えてく  
れないか？」

「はい、分かりました！」

(今こそ我が教師としての全ての技能を注ぐ時！)

何か無駄に張り切る俺。

「さーで、アスナ始めようか。まず、此処に関してだが、こ  
う覚えると良いだろう。次に、こんな感じだな。で、特  
に、は重要だな。で、ついででいいが、も覚え  
ておくと良いぞ？」と、まあこんな感じだな。じゃあ、小テスト始め  
るか」

そう言っつて、アスナに小テストを渡す。

(コレで6点いかなかったら、俺教師としての才能無いな……)

俺が、本気で教えても6点取れなかったら俺はきつと教える才能が  
皆無なんだな……とか思っている、書き終わったアスナが採点を  
頼みに来た。

「終わったわよ」

「分かった。採点するぞ……」

俺はドキドキしながら採点をする……。

採点結果は………7点だった。

俺は、嬉しくてアスナに抱き付き、頭を撫でる。

「やったー！良かったな、アスナ！」

「へ…／／ちよっ…／／止めなさいって…」

抱き付かれ、顔が赤くなるアスナ。

俺は、気付きアスナから離れる。

「おお、悪かったなアスナ。ついつい嬉しくなってしまうてな」

「何で、合格した私より喜ぶのよ……」

そう言って、アスナは呆れていた。

「ルーク先生、スゴいですね！あのアスナさんを一発で合格させる

なんて!」

(おい、お前の中のアスナはどんな存在だよ……………)

そんなことを思いつつ、補修は終わった…。

そして、次の日…。

俺が巡回(暇だからつろちよろ)していると、高校生と何か揉めてるのが目に入った。

(全く…)

「それっ!女子高生アタック!」

(何だよ、そのネーミング……。無いわー…)

とか思いながら、アキラの前に出てボールを片手で止める。

「なっ!?!」

女子高生Aはボールを片手で止められたことに驚いた。

「全く…年上が年下をなぶるのは戴けないな…。力を行使し、相手を退けていいのは、バカかガキか動物だけだ。大人気ないとは思わないのか？高校生諸君」

「確かにそうですね……ルーク先生の言う通り引くことにしま……ぶ！」

引く寸前でアスナが高校生Aにボールを当て、また争いを始める。それに、ネギも加わり更に争いが進みそうになる。

「全く……バカ野郎が……」

俺は、アスナと委員長のブレザーの後ろを掴み持ち上げる。

「ルーク先生！？」

「全く……うちの生徒が悪かったね？先程言った通りに引いて貰えるね？高校生諸君？」

「……分かりました……」

そう言って、高校生達は引いていった。

「悪いのはアイツらなのよ！」

「手を出したらお前等が悪くなっちまうんだよ。な、タカミチ？」

横にいるタカミチに聞く。

何か出番取ってスンマセン。

「そうだね。手を出したら君の負けだよ、アスナ君」

(タカミチ！グッジョブ！)

タカミチの言葉に心の中で親指を立てる俺。

「さて、片付いたし向かおうか…。次は体育。準備して移動するかね？」

「あ、あの……ルーク先生、タカミチ……ありがとう」

ネギが何かお礼をしてきた。  
意味分かん。

「大丈夫だ、気にするなよ」

「そうだね。こういうこともあるさ」

二人で励ます。そうだ！

「ネギよ。次の体育、お前も来い」

「えっ！あっ？はい！分かりました！」

そう言ったので、俺は移動し準備をし、行くと……。  
2-Aの奴等と高校生が争っていた。

「あら、ルーク先生。また会いましたね」

「全く…またケンカか…。懲りんな、お前等も。取り敢えず、暴力は無しだ。分かったな？」



そう思ってたなら、怖いくらいの勢いでテンションが上がってる6人がいた。

「フフフフフ……」「」

(怖い……怖すぎる……マジ泣けるよ……)

主に、真名、刹那、楓、古菲、シエラ、サラが何かヤバい状況になっていた。

「何でアイツらはあんな事になってるんだ？」

「うう、千雨ちゃん。怖いよ……」

そう言っつて、千雨に言っつ。

「私に言っつな！今の私の方が怖いんだ。主にあの6人の視線が！」

とか言っつてる間にメンバーが決まり……。

補欠は、葉加瀬、四葉、村上、鳴滝姉妹、エヴァ、茶々丸、チアリ

「ダー組、ザジだ。」

勿論、俺&ネギも参加する事になった。

「フフフフフ……」

(怖い!さっきから怖いよ!)

そうやってる間にアウトになっていく2-Aメンバー。あつと言つ間に7人がアウトとなった。

「次に狙うのは……どー見ても取る気のないやつ!」

そう言つて、球を投げ鳴滝妹が犠牲となる。

「そろそろ、動くとするか……」

「後ろ向いてるのが悪いのよ!次はアンタよ!」

そう言つて、のどかにたまを投げる。

俺は、アスナがのどかを引っ張りに行ったのを見て、球をキャッチ

する。

「ナイスアスナ！」

「アンタこそね！」

俺は、相手に向かい球を投げつける。

「ほらよっと！」

球は、見事に当たる。

「ハヤツ!？」

「アスナ以上の早さの球を投げるなんて!？」

2 - Aの奴等はかなり驚いていた。

「ほい、アスナ！」

「分かったわ！えい！」

しかし、高校生Aはアスナの球を止める。

「えーっ!？」

「バカカのアスナさんの全力投球を片手で!？」

とか言っただけ驚いていた。

(全く……阿呆過ぎる……。)

とか思っている……

「何せ私達の正体はドッジボール関東大会優勝チーム麻帆良ドッジ部」黒百合「！」

「うわぁ、痛いヤツラだー……」

と、俺は本音を出してしまう。

「だよな？」

「そうだな」

サラとシエラが頷く。

その間に、何かかなり進んでいた。

「必殺 太陽拳！」

アスナに球を当てる高校生A。

一度当たり、また当てようとしたので、間に入り弾を取る。

「戴けないな、コレは…。キサマら『教育的指導』の開始だ！行くぞ！」

「「「ああっ！」「」「」

返事をしたのは主に6人。

「オラアッ！」

俺は、球を一人に投げつける。

「なっ!？」

球は当たり、次に真名に渡る。

真名も球を当て、次に刹那に渡りまた当て違うヤツに当たる。  
そんな感じで、あっという間に試合は終わりを告げた。

「終了ってな…。」

そう思ってゆっくりしていると、高校生Aがアスナに球を当てようとしてくる。

「まだロスタイムよっ!!！」

ゴミだなアイツ…。

「アブねえ、アスナ!」

そう言って俺は、球を止める。

「脳髓まで腐ってやがるみたいだな……。本当の『教育的指導』が必要だな！オラアアア！」

力の3割りくらいの力を出し、高校生Aの真横に球を当てる。当たった球は、爆音を立て弾き飛ぶと同時に、物凄い風を発生させ、服を破り散らす。

「あっちゃああ……。やり過ぎたかねえ……。クレーター出来てるしい……」

「お、覚えてなさいよーッ！」

何処の雑魚の悪役だ、キサマらは……

ちなみに、俺はその後皆に説教された。

まあ、屋上をクレーター付きにしたのだから当たり前だが……。

この後、屋上の修理をさせられたが、頑張って半日で終わらせたのだった……。

## 補修と戦い（後書き）

今回のルークは

ネギのお話のヤツをバツキリへし折り、タカミチの出番を奪い、ネギが色々するはずのドッジボールの出番すら奪う。

ネギの存在を薄くさせていきますね…。

修学旅行くらいにはネギはもう消えているのでは？と思わなくもなかった今回の話でした。

## エヴァ & 茶々丸と仮契約（前書き）

いつのまにかお気に入り件数が200件突破！  
更に、PV15万にユニーク2万突破！

ホントこんな駄文を読んでくれる皆さんに感謝いっぱい的作者です！

これからもよろしく願います！

エヴァ & 茶々丸と仮契約します。

カードの表記は後書きで書きます。

## エヴァ&茶々丸と仮契約

俺は今日、いつものように授業をしていた。

「さて、今日の授業も終わりか…」

そう言いながら、教材を片付け帰る準備をしていると、茶々丸が来た。

「ルークさん。マスターが呼びです」

(む？何のようだ？)

「分かった。それじゃあ準備も終わったし、行こうか？」

そう言い、俺は茶々丸と共にエヴァの家へと向かった…。

「何の用だったんだ、エヴァ？」

「いや、この前の約束をやるうと思っただけ？」

約束？

……………あぁ。

とか思い出していると、茶々丸がお茶を出してきた。

「マスター。ルークさん、お茶をどうぞ」

茶々丸良い子だな。

「エヴァ！茶々丸をくれ！」

「やらんわ！！……………つてオイ！茶々丸！！」

茶々丸無言で此方に移動。

今までの成果が出た！

地道に親睦を深め、毎回のようにこの台詞を言ってきた成果が！

「……………すみません、マスター」

「すみませんじゃないだろうがあぁ！！」

このあと、何だかんだで茶々丸はエヴァの元に連れ戻された。

（感情が増え始めたよな…。人らしくなってきた。肉体も葉加瀬に人工スキンにしてもらって人と同じかんじにしようかな？）

そんな事を考えていると……

「おい、ルーク！聞ってるのか！」

「ん？茶々丸どうしたの？」

敢えて茶々丸に聞いてみた。

「いえ、マスターがルークさんと呼んでいるんですが……」

「分かってるよ？」

「分かっててボケるなあぁあ！！」

エヴァ最近ツツコミ化してない？

まあ、必死な所が可愛らしいから良いけどね？

「アハハ、ゴメンゴメン。で、仮契約の話だっけ？」

「そつだ！早く仮契約するぞ！」

え……？

マジですか？

…マジだろうな。うーん…

「分かった。仮契約しようか。勿論茶々丸もね？」

「私ですか？…私はガイノイドです」

茶々丸は少し悩んでいるように見えた。

ああ……、そう言う事か。

「茶々丸にも「魂」はあるよ。意志を持つ者に魂は宿るってね？茶々丸はさつき俺の元にマスターであるエヴァを無視して来ただろ？只の機械ならそんな事出来ないよ。だから………茶々丸に魂は……ある！俺が保証する！絶対だ！だから、茶々丸も仮契約出来る。必ずだ」

こういう事かな？

「はい、ルークさん。ありがとうございます。」

オツケーととっても良いのかな？

「それじゃあ、仮契約をどうぞ！」

「分かった。それじゃあしよろうか？」

そうして、まず俺はエヴァと仮契約をした。  
形式は俺が従者で、エヴァが主だ。

そうして、俺の仮契約カードが出た。

カード表記

名前 BULK ROK

称号 灼髪の英雄

色調 金、銀

徳性 希望

方位 中央

星辰性 恒星天

アーティファクト      パンドラの箱

…マジで？

パンドラの箱とかアレ確か災厄と絶望が詰まってる箱だったよな？

あ、希望もあつたっけ？

まあ、良い。

次は、茶々丸とだな？

「さて、茶々丸。仮契約しようか？」

「はい」

うん、良い目だな？

やっぱり茶々丸に魂はあるな。

そう思いながら、キスをする。

……

中々出ない…。

そう思っていると、茶々丸が涙を流した。

…… 本気で行こう。

俺はかなりの魔力を込めた。

「んうう！？」

何か茶々丸が魔力が込められ過ぎて真っ赤になってたけど、仮契約のカードが出た。

「やっぱり茶々丸は魂があつたね？はい、仮契約カード」

カードを複写し、茶々丸に渡す。

「ありがとうございます、ルークさん」

何か魔力が多いのか、顔が赤くなって、可愛らしい。マジで葉加瀬に人工スキン作ってもらおう。表情豊かな茶々丸を見たいし。

因みに、カード表記

名前 CARACURI CHACHAMARU

称号 想う人形

色調 白

徳性 愛

方位 西

星辰性 金星

アーティファクト 空とび猫

何だ？空とび猫って？

んー、使わんと分からんな。

まあ、今は良いか？

いっぺん俺が使ってみたいし。

……………あ。

「あ、茶々丸。これで俺も茶々丸のマスターだ。今こそ俺の所に！」

「やめんかああああ！！！」

エヴァに察知されて、殴られた。

「ゴフウツ！？」

這いつくばる俺。

惨め……。…………シクシク。

「大丈夫ですか？ルークさん」

茶々丸は俺に手を差し伸べてくれた。  
ホント良い子や。

「ありがとう、茶々丸。そだ。アーテファクト使おう。アデアット  
」

そう言つと箱が出てきた。

「何だ、この箱は？」

エヴァは不思議そうに箱を見る。  
フッフッフ…。

神話的モノとは思ってないだろう。

「これはパンドラの箱だぜ？」

「なんだとおおおお！？」

神話でも有名なヤツだからな。  
コレなんだろ？  
開ければ分かるかな？

「開けようかな」

「やめろおおおお!!」

全力で止められた。

まあ、神話じゃ開いたら災厄と絶望が出るもんな?

「えい!」

「やめろおおお!!」

全力で茶々丸を連れて、退避したエヴァ。

もしなんかあっても俺が犠牲になるだけ……………か。

ヤバい、涙が出そう。

マジ泣いて良い?

ねえ、良いよね?

「……………何も出ないし。……………俺なんか独りで孤独に死んでいけば良いんだよーだ……………」

隅でいじけ始めた。

(だって、二人とも酷いんだもん…。俺なんかどうでも良いのかな……………?)

ああー、マジ涙出そう。。。)

隅での字を描いてると茶々丸が慰めに来た。  
何故の字かって？

勿論気分だ！

「ルークさん？大丈夫ですか？……すみません。マスターに引っ張られたもので連れていかれてしまいました」

サラッとエヴァを売る茶々丸。

「おおおおおい！！」

エヴァは何か絶叫してた。

「茶々丸う。ありがとう、茶々丸はやっぱり優しいなあー」

とりあえず、抱き着いた。

反応は無し……ってワケでも無かった。

「ななななな……」

動揺？

顔は変わってないけど、何かこの感じ良いなー。

「アハハー。とりあえず箱の中の物を出すかなー」

頭を撫でつつ言った。

人工スキン着けた方が抱き着き心地向上するから、やっぱり後で葉加瀬に頼も！

ガチャン！ゴトツ！ポトンツ！ガラガラガラ…

何か結構出てきた。

あれ？紙？

とりあえず、紙を取った。

そこには、

『内容物リスト』  
と書いてあった。

(どれどれ？何入ってんだ？)

契約の指輪

絶対結界の耳飾り

(ピアス?)

絶望の黒鎧

虐神の仮面

災厄の黒刀

邪悪の両脚鎧

……………何かエグいよ……………

恐すぎる……………

何か名前全部黒くない?

……………後半だけ……………

「どれどれ?……………」

エヴァが見て固まった。  
分かるよ、その気持ち。  
何か、かなり暗いもん。  
英雄なのに……………。

「……………お前本当に英雄か？」

「言わないでえええええ！！気にしてるんだよ！？？」

ホント言わないで欲しかった……………。

けど、二つ名的には……………うん。  
イメージピッタリだわ。

「けど、二つ名的には……………アリだな」

「先に言うなよおおおお！！！」

アレか？

心読んでんのか！？

「心は読んで無いぞ？」

「読んでるだろおおおお！！？」

マジでエヴァ……………。

読んでるだろ？

と、まあこんな感じで話し続けたのだった……。

エヴァ&茶々丸と仮契約（後書き）

カード表記

名前 BULK ROK

称号 灼髪の英雄

色調 金、銀

徳性 希望

方位 中央

星辰性 恒星天

アーティファクト パンドラの箱

カード表記

名前 CARACURI CHACHAMARU

称号 想う人形

色調 白

徳性 愛

方位 西

星辰性 金星

アーティファクト 空とび猫

パンドラの箱内

『契約の指輪』

生物と契約を結び、眷属とさせる指輪

『絶対結界の耳飾り』

込める魔力量によって、質が変わる結界を生み出せる  
見た目は、羽の形。

『絶望の黒鎧』

魔力無効化の効果が付いた鎧。頭と足の部分はない。  
見た目は、右肩から後ろに向き角みたいなのが生えてる。

『虐神の仮面』

狐？みたいな見た目をしている。次元を歪める力を持つ。

『災厄の黒刀』

黒い刀身の両刃刀で、魔力を乗せると禍々しい邪気が刀身を覆う。

『邪悪の両脚鎧』

黒い龍を象った足鎧。

スピードを上げる力を持つ。

って感じですよ。

茶々丸の仮契約カードは、ただ単に称号が変わっただけです。

図書館にて（前書き）

色々学校行事が重なって更新が…。  
更に途中からグダグダに……。。

## 図書館島にて

テストが近づいたある日…ネギに最終課題が渡されてきた。

「期末で最下位脱出ねー……」

「意外と簡単そうじゃ無いですかー」

ネギはそう言って笑うが、内心事を甘く見すぎだと思った。

（あのクラス中々点あがねーの知らねえだろ……。もうテスト近づいてるし、一朝一夕じゃキツイぞ？）

そして、HRになり……。

どうやら、今日は大・勉強会をするらしい。

「はーい！提案提案」

「はい！桜子さん」

俺は、ネギの横でゆっくりしてるワケなんだが、どうにもこの提案には、嫌な予感しかしなかった。

「では！！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

おい！それはねえだろ。

ネギもソコは断れよ？

「良いですね。それで行きましょう」

(こんの……………エロガキがあああああ！！！)

心の中で叫んでいたら、ネギが喋ってきた。

「こ、このクラスってこんなにテスト順位悪いんですね……………」

良いヤツもいるかな？

「数学は結構良いぜ？」

「そんなんですか？じゃあ……」

そう言つて、数学だけの順位表を作る。

その瞬間、ネギが固まった……。

「え？」

「どつした？」

啞然とした表情でテスト順位を見るネギ。

それから、少しして復活し……

「スツゴく良いじゃ無いですか！？」

それもそうだ。

何せ数学は全員が順位50番以内に固まってるからな。

「だろ？まあ、やっぱ超と葉加瀬が一位二位独占なんだがな？」

正直、葉加瀬には今は頭が上がる気がしない俺。

理由は、茶々丸の人工スキンを作つて貰ってるからだ。

無論経費は俺が払い、その上報酬も払ってるんだが。

「ルークさんが全教科教えてくれれば良いんじゃないですか!？」

そんな突拍子も無いことをネギが行ってきた。

「バーカ。それじゃ、俺の正規採用試験って感じじゃねえか」

お忘れかも知れんが、俺はネギに魔法使いって事がバレてない。だから、ネギは俺にコレが正規採用試験だと言っているのだ。

「そつですね……」

とか、言ってる間に時間が過ぎてった。

……まあ、ネギのせいで一悶着有ったのだが…。

そして現在俺は、爺に呼ばれて学園長室に来ている。

「どうしたんだ、爺？」

「いや、木乃香達が図書館島に行こうとしておるのじゃ。だから、その護衛に行つて貰えんかの？幻術を使ってバレないようにして行

って貰いたいんじゃないが…」

そんな事かよ？

虐神の仮面付けて行こーっと！

見た目アレだけど良いだろ？

「報酬は？」

「前200後300でどうかの？」

因みに言うと、コレは万の単位だ。  
結構高いな？

「オツケー。構わんぜ？」

「なら、よろしく頼むの？」

そうしてその夜…。

アイツラが動いたので、俺も動く事にした。

行く途中で、ミーシャ、サラ、シエラにかなり言われたが何とか出て、現在は虐神の仮面を付け、メルキセデクの書がある部屋に來ている。

「英単語ツイスターね…」

因みに、声の変声装置も付いているので、バレる心配はない。

「貴方は誰ですか？」

ネギが聞いてくるが、アホなのか鍛えるためか魔法を封印しているみたいだ。

まあ、俺も封印してるワケだから人の事は言えんのだが…。

「フム、我が名は飴鷲慧だ」

偽名が思い付かなかったので、昔の名を名乗る事にした。

「飴鷲さんですか。貴方は何者ですか？」

この仮面から出る異様な気配がネギには感じれたらしい。

「フハハハハ！さて、何者だろうな？」

そう言っつて誤魔化す。  
それと同時に、アスナ達がDISHの日本語訳をおさると間違え、  
床が崩された。

(全く爺は……石像使っつて何してんだっつつの……)

俺はまず落ちていている木乃香とアスナ、まき絵を掴み、近くに寄せる。  
更に見えないようにだが重力魔法を使い落下速度を早める。

「掴まっつてろ！」

そう言っつて、三人に衝撃が伝わらないように降り立ち、さらに古菲、  
楓、夕映も衝撃が伝わらないように降りさせる。

……ネギは直に落ちたが……。

「無事か？」

「あ、ありがとう。助かったわ……」

アスナが素直に礼を述べる。  
気を失っつてるネギは無視らしい。

「なに、気にする事はないさ。俺が助けたかったから助けた。ただそれだけだ」

「ほんま助かったわー。ありがとなー。名前教えてえなー」

いや、木乃香。お前は護衛対象に入ってるから助けるのは当たり前なんだ。

「鰐鷲慧だ」

「慧さんやねー？何でお面してるんやー？」

因みに、今は仮面のしたに幻術が掛けてあるので、外されたとしても余裕だ。

見た目は、血のような紅髪で、サイドをオールバックにしている感じだ。ついでに言うと目は紅い。

「何だ？見てえのかよ？」

「見たいわー」

（何で見てーんだよ？ワケ分からん……。まあ、良いか。見せてや

るのも…。)

そう思い、俺は仮面を外した。  
その瞬間固まる6人。

……何だよ？

「……何で隠してるの？」

隠してたら悪いのか？

「気分だよ気分。つてか、オマエラさー。そんなに黙られると俺でも流石に傷付くんだよねー？そこら辺分かってるか？」

「あつ！？ゴ、ゴメン！」

アスナが素直に謝る。

ホント素直で良い子だわー。

ネギのパートナーになっちまうのが悲しい！

「まあ、良いか。つてか、オマエラもつてすぐテスト何だろ？」

「え？あ、ああ、そうよ？」

何で知ってんのって顔してんな？

「じゃあ勉強でもしてる。此処は地底図書室だ。教材は沢山あるからな」

「此処が幻の地底図書室なのですか！？………と言う事は！まさか貴方が伝説の図書館島の司書なのですか！？」

興奮気味に言う夕映。

（いや、ソイツはアルの事だろ。ってか、アイツ此処に居んのな？）

後でアルのところにいくと考えると、俺は問いに答える事にした。

「いや、俺は司書ではない。司書の事は知っているがな？」

とか話していたらネギも起き、解散したので俺はアルのところに向かった。

「よお、アル。こんなところにいたんだな？」

「ルークじゃありませんか。変装なんかしてどうしたんですか？」

変装って……。

「幻術だよ」

「そうなんですか？全く気付きませんでした……」

幻術も結界もバレないのが一流の証ってね？

「バレないのが一流の証なんだよ。そう簡単にバレてたまるか」

「確かにその通りですね……」

この後、アルと暫く話していた。

（全く……昔の戦友に会えるとは、この依頼も捨てたモノでは無かったな……）

と、という感じで過ごしているとあの爺ゴーレムが出てきた。  
現在は、まき絵が捕まっている状態となっている。

「はぁ……。全く面倒起こしやがって…。」

「助けてーっ!！」

俺は、魔法がバレるわけには行かないから縮地の要領で近付き、ゴーレムの腕を手刀で切り落とし、殴り付ける。

「フオオオオ!?しかし、この迷宮は通常の道で帰ると三日かかる。  
諦めるのじゃのー!！」

爺ゴーレムはそう叫び崩れ落ちた。  
何故かこの間に古菲がメルキセデクの書を手に入れてたが、無視とする。

「三日もかかるの!?!」

「落ち着けアスナ。確かに『通常の道なら』時間が掛かる。だが、  
『通常じゃない道なら』どうだろうな?」

そう言うと、アスナも分かったようで裏道を探す。  
暫く探すと滝の中に非常口が有るのを見つけ、問題を解きつつ進んでいく…。

暫く問題を解いていると、夕映がこけて足を挫いた。

「こんなところに木の根が…。あ…足をくじきました」

「大丈夫か、夕映。よっ！」

そう言って、夕映をお姫様だっこの持ち方で持ち上げる。

「あ…！？な、何をするのですか？」

「挫いたんだろ？だから持ってるだけだ」

平然とした顔で言う。

「そうですが…。は、恥ずかしいです…」

「気にすんな！」

そう言っつて、直通エレベーターまで走る。  
そして、エレベーターに着くが…

『ブブブーッ！』

やはりメルキセデクの書には、盗難防止細工が付いているようで、直通エレベーターを使って持っていく事ができなかった。

「何で重力オーバーなのよおおお！？」

「落ち着けアスナ。ただ単にメルキセデクの書に盗難防止の細工が付いてるだけだ。メルキセデクの書を置けば上がれる」

その言葉に従い、アスナはメルキセデクの書を外に出す。  
すると、今まで鳴っていたブザーが鳴り止み、一階へとエレベーターが動き出した。

「ホントね…」

「だろ？要は骨折り損のくたびれ儲けってヤツだな？」

そう言うと、アスナはガクリと腕をついて落ち込んでいた。

そして、一階につくと同時に俺は姿を眩ました…。

結果から言うと、2・Aが一位となった。

平均点は83.5と割と高く、俺は食券長者となったとだけ言っておこつ…。

ネギじゃエヴァにも俺にも敵わないぜエエエ！！（前書き）

い…一ヶ月振りの更新だと…。

って、お気に入り300件越えてた…。  
一体何があつたんだアアア！？

ネギじゃエヴァにも俺にも敵わないぜエエエ!!

さて、気付けば既に一年経ちもう三年の春となった。

今日は身体測定の日で、俺はネギがしゃべってる横であくびをしていた。

「…………ふああ……………」

「ネギ先生。今日は身体測定ですよー。Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「ん？」

(仕方ねえ…。さっさと外に出ますかね…)

原作ではこのネギがエロガキ度を存分に発揮しておきたイベントから回避するために外に出る。

「で、では皆さん。身体測定ですので…………えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください!」

「ネギ先生のエッチ〜！」

「わ、ルーク先生……って、いない！？……うわ〜ん！！」

ネギは泣いて出ていった。

「全く……いい加減学習しようぜ……」

俺は取り敢えず流れを知ってるため直ぐに保健室へと向かっていった。

「あ！ルーク先生！大変や！まき絵が……」

「ああ、俺は今から向かうからクラスのヤツにも教えてやってくれ」

「分かったわ！」

そう言って亜子は去っていった。

「……さて、どう動くべきかな〜」

俺は取り敢えずまき絵を見に行った後、今日は授業も無い為、屋上へと上がっていった。

「…寝るか。眠いし」

そうして、今日は屋上で延々と眠り続けた。

そして放課後…。

俺は葉加瀬のところに向かっていた。

理由は、茶々丸に人工スキンをつけたと聞いたからだ。

「楽しみだ〜！」

そう言いつつ、俺はスキップで葉加瀬のところに向かい……

「や、葉加瀬！」

「ルーク先生。依頼通り完了し終わりましたよ？…それにしても、何で急に人工スキンを付けようと思ったんですか？」

「抱き心地が違うから！」

「はっ!?!」

葉加瀬は何言ってるんだコイツ?みたいな顔で俺を見てきた。

(止めるオオオオ!!そんな目で俺を見るなアアアアア!!)

そう心の中で叫んでると、茶々丸が後ろから出てきた。

「ルークさん」

「あっ!茶々丸う〜!」

出てきた瞬間俺は茶々丸に抱き着いた。

「んー、柔けー」

「ル、ルークさん…//」

そう言っつて茶々丸は顔を真っ赤にしていた。

これは…素晴らしい！

「有り難う葉加瀬！！」

「え？あ、どうも」

何だかよく事態が理解できないといった感じの葉加瀬を後に俺は赤くなってる茶々丸を連れていくのだった…。

そして、その夜……

俺はアーティファクト内の絶望の黒鎧と災厄の黒刀、邪悪の両脚鎧を取りだし装備し、頭は幻術で黒い兜を被っていた。

「ルークさん。その姿だけ見たらラスボスみたいな雰囲気が出てますね？」

「いんや、俺は裏ラスボスだ！全ての能力大体フルの勝てんのかコイツ？みたいなキャラだな！FFのミネ ヴァだな！」

ミネ ヴアマジ強いよ？  
裁きの矢めっちゃつええし！

「…確かにそうですね。…マスターの合図が遅いですね」

「ってかアイツ今助けいんの？もう全盛期状態だぜ？」

「確かにそうですね。もう戻りますか？」

其処では何だかエヴァがネギを遊ぶように蹂躪してた。

………虐め？

ってか、さりげなく茶々丸エヴァ捨て置こうとしてね？

「そつだな。そつしよう………あ。合図出たし……」

「………チツ………（ボソッ）マスターの合図が出てしまいましたし、行きましようか」

今舌打ちみたいなのが聞こえたけど、きつと幻聴だ。そつだ。そつに違いない。

「来てやったぞエヴァ」

「……………お呼びですかマスター」

茶々丸は不機嫌そうに答えた。

……………幻聴じゃ……………ないのか？

「茶々丸うゝ！可愛くて純真なお前に戻ってくれー！」

そう言って、茶々丸に抱き着く。

「へ！？／＼／＼……………分かりました」

「何をやってるんだー！」

「ゲゲツ！？」

そう言って話してたらネギが話し掛けてきた。

「あ、あなたは茶々丸さんと……………誰ですか？」

(あ！名前どうしよ..)

「俺はラギウス・K・ライゼンバルツだ」

そう名乗った瞬間エヴァ&茶々丸に連れて行かれた。  
名前？気分だよ！

「おい！何だその名は？(ボソツ)」

「ルークさんそんな名前だったんですか？(ボソツ)」

「違うぜ？偽名だって偽名。頼むから絶対にバラさないでくれよ？  
(ボソツ)」

「あ、あのー。もう良いですか？」

ネギが居づらいように言ってきた。

「オーケー。じゃあ俺がお前の相手をしてやるぜ。良いよなエヴァ  
？」

「ああ、良いぞ?」

「三人いるのに、貴方だけしか出て来ないんですか?」

そう言って、ネギは聞いてきた。

「お前なんか俺だけでヨユーだったの。それに…女の子には優しくしないと?」

「……僕をバカにしてるんですか?」

「さーねー」

そう言って俺は手をクイクイとして、来いと挑発する。

「行きます!ラス・テル、マ・スキル、マギステル!風の精霊11人。縛鎖となりて敵を捕まえろ!魔法の射手・戒めの風矢!」

「よっつ」

俺は八工を払うかのように手を振り、魔法の射手をかき消す。

「え!?!」

「んー、弱いなアア?」

「なら!ラス・テル、マ・スキル、マギステル!来れ雷精風の精!  
!雷を纏いて吹きさすべ南洋の嵐!雷の暴風!」

「じゃ、俺もやるか。リ・ゲル・クラスト・カラストフィー!。魔法  
の射手・闇の一矢」

俺は一矢に多少魔力を込め、ネギの雷の暴風に当て、相殺する。

「ええつ!?!」

「まだまだよええな」

「お前のバグさには毎回驚きが隠せないな……」

「流石ですル……ラギウスさん！」

茶々丸…頼むから本名だけは言わないでください…。

「フハハハツ…！さて、俺達と会ったからただで済むワケはねえよなあ？アハハハツ！」

そう言いながら俺は災厄の黒刀に魔力を乗せ、邪気を纏わす。

(うわぁ……何か俺めっちゃ悪者な感じだな…)

「ひっ………！」

「怯えちゃってまぁ……。ハハハツ！」

「ウチの居候に何すんのよーっ！！」

「うおっ！？」

「はびびっ！？」

「あつ……」

アスナが飛び蹴りをかましてきたようだが、俺は即座に後ろへと縮地ばりのスピードで避けるが、油断してたエヴァと茶々丸はアスナに蹴り飛ばされてしまった。

「全く…大丈夫か？エヴァ？茶々丸？」

「あある……ラギウス。大丈夫だ」

「ル…ラギウスさん。ありがとうございます」

……お前ら然り気無くバラそうとしてるよね？  
ねえ泣いて良い？

良いよな？冷めざめと泣くぞ！

大の大人（十七歳）が一目も気にせず泣くぞ！

ソレはソレは惨めだぞ！

良いのかコノヤロー！

そんなヤツの隣にいる事に耐えられるのか！

！  
そんなヤツが自分の従者&主だという事に耐えられるのかバカヤロ

「お……お前ら…。チクシヨー！」

俺は建物の隅の方でいじけ始めた。

「おい、ル…ラギウス！何でいじけるんだ！？」

「良いよ…。お前らは俺を遠回しに苛めたいんだな？苛めてンだろ？もう良いよ…。俺しばらく魔法界に帰ってやるよチクシヨー！」

「ル……ラギウスさん！そんな事言わないで下さい！」

最早一文字でバレるくらいまで問題発言した事で俺の心はバツサリ切り捨てられた。

「茶々丸…。チクシヨオオオオオ！！！」

「待て！！！」

「待ってください！！！」

俺は全力で逃げ去ると、エヴァと茶々丸も俺を追い掛けて、その場から去っていった。

「あの鎧は一体なんなのよ……………」

「分かりません……………」

残されたネギとアスナは呆然とその場に立ち尽くすのだった……。

ネギじゃエヴァにも俺にも敵わないぜエエエ!! (後書き)

エヴァ編は次の次くらいであっさり終わりで、その後に修学旅行かな？

オコジヨだと！？そんなの知らんぞ！？（前書き）

編集すんの忘れてた！

つてなワケで編集しなおしました。

オコジヨだと！？そんなの知らんぞ！？

次の日……ネギはめっちゃいじけてた。

(ヤツベエ……。やり過ぎた……。：：けど良いんだよ！俺だって昨日めっちゃ心に傷を負ったんだからな！！)

「ヤツヒャー！おはようさーん！」

「おはようルーク先生。って、何でそんなにテンション高いのよ？」

何で？

高くしねえとやってらんねえんだよ！

昨日俺だけいじけまくったことか！

「アスナの考えに任せるぜ！」

「何をよ！？」

そんな感じで進み……。俺は授業が始まった頃にはやられたボクサー

みたいに真っ白に燃え尽きながら座っていた。

「燃えた…。燃え尽きたよ……。真っ白にな……」

「大変や！ルーク先生は真っ白になってもうてるし、ネギ先生はポーツとしたりよ!？」

そう言っただけでクラスの全員はかなり騒いでいた。

…俺は真っ白になってたが……。

で、そのまましばらく経ち、俺は完全復活した。

「復活！」

とかいってたら、何か…多分人じゃないけど…が学園都市内に入り込んだ感じがした。

「仕方ねえ。侵入者を捕縛しようかな……」

そう言いつつ、俺はエヴァの所に向かった。

「なあエヴァ？侵入者排除しようぜ？」

「まあ、調べに行くくらいなら良いだろう」

「じゃ、茶々丸を迎えに行こうぜ！」

そう言っただけ俺達は茶々丸を迎えに行き……歩いてたら急にアスナに会った。

（ヤ、ヤバい！）

俺は速攻で幻術を使い、昨日と同じ姿になった。  
アーティファクトとは違い効果はあまり無いが…。

「……ほう神楽坂明日菜か」

「やーちわー」

「……何よその挨拶……。ってあんた達！ネギをどこへやったのよ」

「しつりませーん！」

「…アンタの言い方ムカつくわね…」

そんな感じで話し、エヴァは満月まで戦わんとか言ってた。  
余裕過ぎで無いかな…。

「じゃな！」

「ええ…じゃあね」

と、割と話してくれ、俺達は侵入者を掴まえに向かった。

「危なかった〜」

「取り敢えず私は疲れたから帰るぞ？」

「何だつてエエ！？チョツ！？俺を置いてくのか！？」

そう言ったら、エヴァはコクリと頷いた。  
チクシヨ〜……！

「茶々丸う！茶々丸も行っちゃうのか？」

俺は、茶々丸に聞くと茶々丸は少し顔を赤くした後喋りだした。

「いえ。私はルークさんについて行きますよ」

「茶々丸！お前私を裏切るのか！？」

「ソレはソレ。コレはコレです」

「何だと！？」

もう最近茶々丸は普通にエヴァを裏切るようになってしまった。

……俺のせいかな？

「……まあいい。なら私も行くぞ」

「なら行こうかー！」

そう言っつて俺達は侵入者の気配を探り、向かうと……其処はネギ達の部屋だった。

「失礼するぜー！」

「ルークさん！どうしたんですか？」

「どうしたんスか兄貴？」

そう言っつて喋るオコジヨが出てきた。

「……………マジで？」

俺はケット・シーしか見た事が無かったため純粹に驚いた。

「喋るオコジヨだと！？」

「どうしたんだルーク。急に大声出して」

「ルークさん、どうしたんですか？」

俺が大声を上げたのに対し、二人が怪訝そうに出てきた。

「エヴァンジェリンさんに茶々丸さん!？」

それでネギは滅茶苦茶に焦っていた。

「……世の中には不思議なモノが存在するんだな……。世の中への見聞が広まったぜ……」

「いや、普通は喋るオコジヨなんていないわよ!? ルーク先生しっかりして!」

と、アスナに諭され俺は復活した。

「それもそうだな! って、コイツはなんよ!」

「俺っちはオコジヨのアルベール・カモミールってんだ! よろしく  
ツス!」

「ああ。俺はルーク・バルクだ」

「ルーク・バルクって……!？」

「よしお前ちょっと来い」

名前に反応したオコジヨを捕まえ、俺は話が聞こえない所に移動した。

くオコジヨ sideく

俺っちは目の前にいるダンナに挨拶した。  
すると、ダンナは少し止まったけど、挨拶を返してきてくれた。

「ああ。俺はルーク・バルクだ」

その名前を聞いた時俺っちは耳を疑った。  
そのダンナは金髪のイケメンと言っ、あの最強の英雄とまんま同じの見た目だった。

「ルーク・バルクって…!？」

「よしお前ちょっと来い」

そう言つて俺っちは急に掴まえられて行かれた。  
まさかこんな所で『破壊神』のルーク・バルクに会えるなんて……。  
サイン！サイン貰わないと！  
俺っち超感激ッス！

）end）

「おい。オコジヨ。お前俺の事バラしたら皮剥いでやる」

「っひい！？けどあの『破壊神』に会えるなんて俺っち超感激ッス  
！サインを！サインを下さい！」

「ヤだよ。いつかな、めんどくせー」

「そ、そんなあつ！？お願いッスよー！」

そんなオコジヨは捨て置き、俺はネギ達のところに戻っていった。  
で、帰ったら既にエヴァと茶々丸はいなくなっていた。

……グスン。  
置いてかれちまったじゃねえかよー！  
泣くぞチクシヨー！

「……………俺も帰る」

「え!？」

いきなりの事でネギ達は驚いていたが、俺は自分の部屋に帰っていた。

「あ、ルーク!もう、何処行ってたの!」

「ネギん所かな?遅くなって悪かったな。ミーシャ、シエラ、サラ」

「何だ女の所じゃ無かったのか?」

シエラがそんな事を口にする。

「いやちげえよ!？」

「フッフ。焦るのは怪しいぞ?」

「いや焦ってねえし!」

そう言っていたら、後ろから背筋も凍るような恐ろしい気配がした。

「ルーク？」

「ハイ、ナンデシヨウカ…ミーシャサン、サラサン」

俺は首をギギギと後ろに向ける。

其処には…二人の魔神が堂々と立っていた。

「アノー、ベンギデキタリハ……」

「却下！」

「ギイヤアアアア！？」

そうして、その日俺は一晚中 O S H I O K I されたのだった  
……。

お説教？……どうでも良いけどオハナシは俺のトラウマ確定だな（前書き）

繋ぎみたいなヤツで話は少なめです。

……………ネギボコるべきかなー？

V S エヴァの時、原作通り負けるか、真祖パワーでフルボッコにするかどっちが良いですか？

お説教?……どうでも良いけどオハナシは俺のトラウマ確定だな

次の日……。

あのオコジヨがなんだか企ててる間、俺と言えば……。

「いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいいごめんなさい  
いごめんなさい………」

絶賛ブツ壊れ中だった。

なんかひぐらしみたいだな。

マジで O S H I O K I っええ……。

トラウマ確定だな、うん。

ちなみに、この日は一日中ブツ壊れてた。

……………そして次の日。

「取り敢えず、バレないようにどうやって茶々丸を助けようかな」

現在絶賛思案中だ。

黒騎士的フォームで行くか、幻術使うかどっちにしよう？

「うーん。やっぱり黒騎士で行くか」

幻術だとややこしくなりそうだし。

「っと、なら行きますかね。アデアット」

装備をし、茶々丸を尾行し始める。

……………俺手際よくね？

きつと某蛇も真っ青だぜ？

前にいるネギやアスナより数百倍上だぜ？

多分気配遮断スキルAランクイけると思う。

「……………それにしても茶々丸良い子だわー」

もうお兄さんグッと来ちゃう！

……あ、ネギやら出てきた。

準備準備……っと。

……アレ？

もしかしてタイミング待ってる俺って酷いやツ？

考えても仕方無いし、ちょっとキャラ付けしてくかな。

「魔法の射手連弾・光の17矢！！」

ほら、もう魔法詠唱……つてええええ！？  
原作より多いんだが！？

「チツ……」

何やっちゃってくれてんだあの薬味！

「茶々丸！」

17矢を片手を払い打ち消す。

「ル……ラギウスさん！ありがとうございます。私は大丈夫です」

「なら良かった」

頼むからバラスのだけは許してください。

「……………おい、薬味」

我ながら恐ろしい威圧感薬味とオコジヨに当ててると思っよ？  
実際薬味とオコジヨの二人、顔真っ青で息苦しそっだし。  
勿論アスナには殺気当ててないよ？  
これ常識ね？

「自分が何したか分かってるのか」

……………無言か。

あ、なんだろ。

凄くムカつくわ。

ガキだと思って何したって良いワケじゃ無いって身を持って教えてやるか。

「お前は茶々丸を殺そうとした。ガイノイドだから修復が効くと思っただか？ふざけるなよこのクソガキが！！」

「…で、でも……………」

「でも、なんだ？自分は子供だからってか？嘗めてんじゃねえよ！  
テメーが撃ったアレが当たってたら茶々丸は確実に死んでいた！ガ  
キは人軽く殺しても良いってか！」

コレ端から見たらガキ虐めてるだけだな。

「あ、あう……………」

「ああん？何だ言いたいコトあんのか」

「ぼ、ぼくは殺す気なんか無くて……………」

……………あ、ブチってきちゃった。

「言い訳か！良い度胸してやがるなこのクソガキ！！テメー今すぐ  
殺して解<sup>ばら</sup>して並べて揃えて晒してやんよ！！！」

零崎ネタを言ってみた。

あ、めっちゃビクってしてるよ。



「いえ、私こそありがとうございます」

ペコって頭を下げる茶々丸。

「んー、可愛いねえ」

茶々丸の頭を撫でる。

あー、和む…。

「る、ルークさん…／＼／」

顔を赤く染める茶々丸。

………す、スゲー良い！

と、そんな事があつた次の日、ネギは逃亡したようだ。

楓に適当にネギ励ましといてって言つといたし大丈夫だろ。

………楓、俺のコトバラさないよな？

その次の日には、エヴァが夢を見られたとか言ってたけど大丈夫だろ。

……さて、もうそろそろ戦いの日だな…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3899m/>

---

魔法先生ネギま！～転生者投入～

2010年11月26日20時30分発行